

平成20年度 学力向上推進事業 実践事例集

- 全国学力・学習状況調査等を活用した
学校改善の推進に係る実践研究 (平成20年度)
- 学力向上実践研究推進事業 (平成20年度～22年度)
- 夢創造！！チャレンジ推進事業
学力向上推進カウンセラーの活用 (平成20年度～)

平成21年3月
秋田県教育庁義務教育課

は じ め に

平成20年4月に実施された全国学力・学習状況調査で、本県の児童生徒の結果は、平成19年度に引き続き好結果となりました。これは、学校関係者のみならず、県民に大きな喜びを与えてくれました。この結果については、学校教育を中心としながら、家庭や地域の教育力、県内大学の協力などの成果によるものであり、児童生徒の頑張りはもちろんのこと、各学校や教育委員会等において確かな学力を身に付けさせる教育活動や施策、教育環境の整備等が効果的に行われていることの証であると考えております。

さて、本県では学力向上にかかわる事業として「少人数学習推進事業」、「学習状況調査事業」、「夢創造！！チャレンジ推進事業」など、数多く実施しています。今年度は、その中の文部科学省指定の「全国学力・学習状況調査等を活用した学校改善の推進に係る実践研究」、「学力向上実践研究推進事業」に、県単独事業である「夢創造！！チャレンジ推進事業学力向上推進カウンセラーの活用」を加えて3つの事業で学力向上推進協議会を構成し、さらに検証改善委員会を加えて、事業を一体化した形で推進し、取り組みの充実を図ってきました。3つの事業は、それぞれの趣旨に違いはあっても、どれも「分かる授業」、「魅力ある授業」の実現を目指し、児童生徒に「確かな学力」を身に付けさせるとともに、個性や能力を最大限に伸ばさせようとするものであります。

本実践事例集は、今年度の取り組みの中から、地域・学校の実態や課題を踏まえた特色ある取り組みや特に効果のあった取り組みを「提案」と「成果」という形でまとめております。学力向上に成果を上げている学校では、自校の課題を明確にするとともに、課題を1，2点に絞って取り組んでいます。また、その営みの中で様々な教育効果を上げています。

各学校においては、本実践事例集で示された「提案」や全国学力・学習状況調査の結果に基づいた秋田県検証改善委員会からの提言を踏まえて、今後の学力向上に係る実践が一層具体的に推進されることを期待しております。

最後になりますが、今年度、実践研究に取り組まれた推進地区・推進校・協力校等及び関係各位に深く感謝申し上げます。

平成21年3月

秋田県教育庁義務教育課
課 長 須 藤 幸 紀

目 次

はじめに

＜平成 20 年度学力向上推進事業＞

本県の取り組み概要及び状況	1
---------------------	---

＜全国学力・学習状況調査等を活用した学校改善の推進に係る実践研究＞

大館市立花岡小学校	5
大館市立花岡中学校	8
能代市立能代第一中学校	11
由利本荘市立下川大内小学校	14
由利本荘市立上川大内小学校	17
由利本荘市立大内中学校	20
大仙市立太田東小学校	23
大仙市立太田南小学校	26
大仙市立太田北小学校	29
大仙市立太田中学校	32

＜学力向上実践研究推進事業＞

美郷町教育委員会	35
美郷町立千屋小学校	37
美郷町立千畑南小学校	40
美郷町立千畑中学校	43

＜夢創造！！チャレンジ推進事業 学力向上推進カウンセラーの活用＞

大館市立川口小学校	47
男鹿市立鵜木小学校	49
能代市立能代第一中学校	51
仙北市立神代中学校	53
横手市立山内中学校	55

平成 20 年度 学力向上推進事業

本県の取り組み概要及び状況

- 1 推進地区・推進校等一覧
- 2 実施計画
- 3 成果と課題

平成 20 年度学力向上推進事業

本県の取り組み概要及び状況

1 推進地区・推進校等一覧

(1) 全国学力・学習状況調査等を活用した学校改善の推進に係る実践研究 (平成 20 年度)

市町村名		調査活用協力校
大 館 市	小学校 1 校	大館市立花岡小学校
	中学校 1 校	大館市立花岡中学校
能 代 市	中学校 1 校	能代市立能代第一中学校
由利本荘市	小学校 2 校	由利本荘市立下川大内小学校 由利本荘市立上川大内小学校
	中学校 1 校	由利本荘市立大内中学校
大 仙 市	小学校 3 校	大仙市立太田東小学校 大仙市立太田南小学校 大仙市立太田北小学校
	中学校 1 校	大仙市立太田中学校

(2) 学力向上実践研究推進事業 (平成 20 年度～22 年度)

推進地区名		推 進 校 名
美 郷 町	小学校 2 校	美郷町立千屋小学校 美郷町立千畑南小学校
	中学校 1 校	美郷町立千畑中学校

(3) 「夢創造！！チャレンジ推進事業」学力向上推進カウンセラーの活用校 (平成 20 年度～)

市町村名		活 用 校
大 館 市	小学校 1 校	大館市立川口小学校
能 代 市	中学校 1 校	能代市立能代第一中学校
男 鹿 市	小学校 1 校	男鹿市立鶴木小学校
仙 北 市	中学校 1 校	仙北市立神代中学校
横 手 市	中学校 1 校	横手市立山内中学校

2 平成 20 年度の実施計画

(1) 研究のねらいと課題

＜全国学力・学習状況調査等を活用した学校改善の推進に係る実践研究＞

①ねらい

平成 19 年度学校改善支援プラン等を踏まえ、全国学力・学習状況調査等の結果から、学力や学習状況等に課題の見られる学校の改善に向けた具体的な取組に関する実践研究を実施し、その成果の普及を図る。

②課題

- ・基礎学力の確実な定着を図る分かる授業の実現
- ・活用する力を伸ばす授業の創造
- ・理解や習熟の程度に応じたきめ細かな指導の充実（理解や習熟の程度の高い児童生徒への

効果的な手立ての工夫や発展的な学習の在り方を含む)

- ・校種間の連携に基づいた授業の充実

<学力向上実践研究推進事業>

①ねらい

地域の実情や課題を踏まえ、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うための実践研究を推進し、その成果の普及を図ることにより学力の向上に資する。

②課題

- ・学習意欲の向上
- ・基礎学力の確実な定着を図る分かる授業の実現
- ・活用する力を伸ばす授業の創造
- ・理解や習熟の程度に応じたきめ細かな指導の充実（理解や習熟の程度の高い児童生徒への効果的な手立ての工夫や発展的な学習の在り方を含む）
- ・校種間の連携に基づいた授業の充実
- ・算数・数学，理科の一層の指導改善

<「夢創造！！チャレンジ推進事業」学力向上推進カウンセラーの活用>

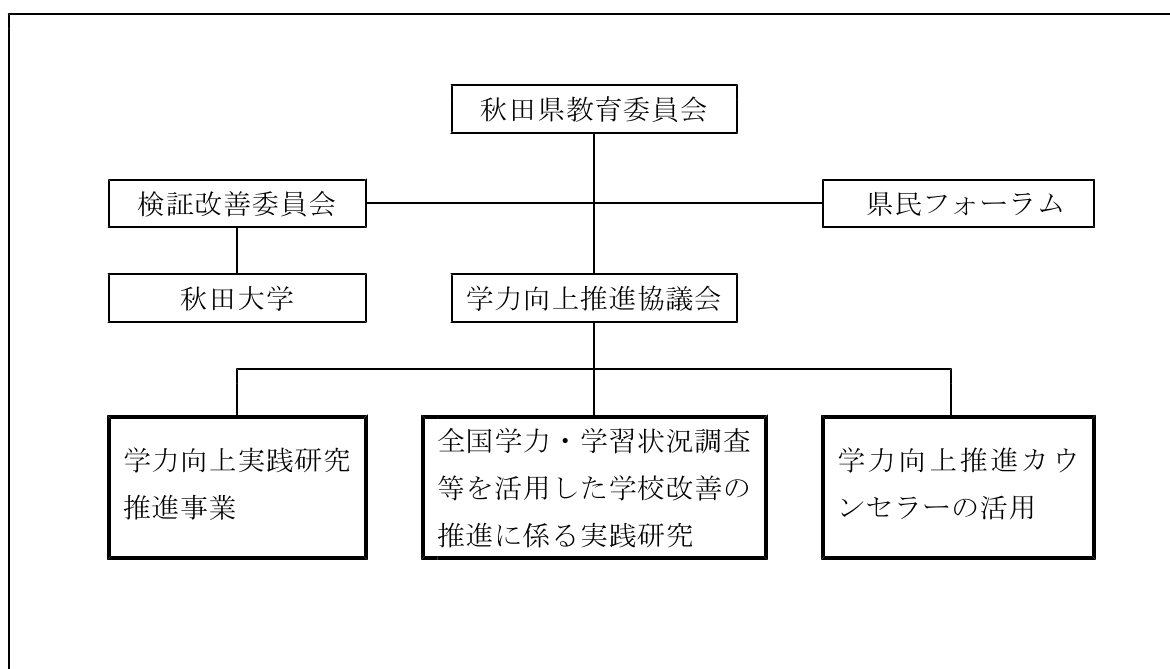
①ねらい

大学教員を学力向上推進カウンセラーとして活用し、課題分析・解決等を目指した研修会や授業研究会を実施することにより、学校教育の課題解決に資する。

②課題

- ・大学と連携した研究の在り方
- ・教師の授業力の向上
- ・教科等を焦点化した授業改善

(2) 実施体制



3 平成20年度の成果と課題

(1) 成果

①研究内容の焦点化，具体化によって特色ある研究が推進された。

	学 校 名	主 な 特 色
授 業 改 善	男鹿市立鶴木小学校	・理科を中心にした基礎・基本の定着の工夫
	由利本荘市立下川大内小学校	・「読み取り」と「まとめ」のためのキーワードを使った授業の工夫等
	由利本荘市立上川大内小学校	・各種調査，レディネステストの活用，座席表の活用，チェックシートの活用等
	大仙市立太田東小学校	・評価問題の実施，ノート指導の工夫等
	美郷町立千屋小学校	・授業改善の視点の設定，学習習慣を確立するために家庭へ向けた通信の発行等
	美郷町立千畑小学校	・「学び合いの場」を設定した授業の工夫，基礎・基本を定着させるための特設時間の設定等
	大館市立花岡中学校	・少人数学習の推進，単位時間ごとのまとめの工夫等
	大仙市立太田中学校	・「P-D-C-A-C-A」による授業改善サイクルの取組等
	美郷町立千畑中学校	・教師の授業力向上を目指し授業参観カードを活用した工夫，生徒の授業評価を活用した授業改善の工夫等
	横手市立山内中学校	・ペア学習による国語科の授業の工夫
活 用 す る 力 を 伸 ば す	大館市立花岡小学校	・単元構成の工夫，実生活とのかかわりを考えた問題や教材の設定等
	大館市立川口小学校	・「読み取る」指導の工夫
	由利本荘市立大内中学校	・教材開発，「学び合う場」を設定した授業の工夫等
	大仙市立太田南小学校	・書くための工夫，伝えるための工夫等
	大仙市立太田北小学校	・「読みの学習」の工夫等
	能代市立能代第一中学校	・「活用の方法」を教えた上で，「活用の機会」をつくる授業の工夫等 ・表やグラフ・地図・写真から，課題を発見していく社会科の授業の工夫
体 制	仙北市立神代中学校	・大学，近隣の学校，指導主事等と連携した共同研究の工夫

- ②推進校・協力校等では、取り組みの成果が現れ、県学習状況調査等によって児童生徒の学力に向上が見られた。また、学習意欲や学習習慣等が望ましい状況になってきている。
- ③「全国学力・学習状況調査等を活用した学校改善の推進に係る実践研究」、「学力向上実践研究推進事業」、「夢創造！！チャレンジ推進事業 学力向上推進カウンセラーの活用」の三事業の連携を図るため、学力向上推進協議会を設置した。他の事業と実践研究の在り方を検討するなどネットワークを広げることができ、事業の充実を図ることができた。
- ④秋田大学の教員との連携により、大学のもつ理論的・専門的見地から指導していただき、研究の方向性や検証方法等を明確にし、事業をより一層推し進めることができた。
- ⑤秋田県検証改善委員会による「H19学校改善支援プラン」により、特に「活用」に関する授業改善が進んだ。
- ⑥推進校・協力校等の自主公開、各教育事務所単位での成果発表会、県研究発表大会での発表により、成果の普及に努めた。

(2) 課題

- ①県学習状況調査質問紙の「勉強が好きだ、分かる」などの回答結果から、小学校から中学校にかけて学習意欲が低下する傾向は依然として続いている。学習方法等について、小・中の連携を強めていく必要があると考える。
- ②知識・技能を活用する力は、まだ課題がある。特に、複数の資料から目的に応じて情報を取り出すことや、説明したり書いたりする力が十分ではない。
- ③「H19学校改善支援プラン」が県内すべての小・中学校で活用されるよう、一層周知することが必要である。

「全国学力・学習状況調査等を活用した学校改善 の推進に係る実践研究」

大館市立花岡小学校

大館市立花岡中学校

能代市立能代第一中学校

由利本荘市立下川大内小学校

由利本荘市立上川大内小学校

由利本荘市立大内中学校

大仙市立太田東小学校

大仙市立太田南小学校

大仙市立太田北小学校

大仙市立太田中学校

基礎・基本を確実に定着させ、活用する力を伸ばす授業の創造

大館市立花岡小学校 校長 佐藤 和広

Ⅰ 学校の概要 (平成20年5月1日現在)

	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特別支援学級	計	教員数
学級数	1	1	1	1	1	1	0	6	1 1
児童数	2 0	2 5	1 7	2 3	2 2	2 9	0	1 3 6	
	学校のホームページアドレス				http://www.oodate.or.jp/school/hanaoka/				

Ⅱ 取り組んだ課題

- (1) 基礎的・基本的な内容を確実に身に付けさせる授業の展開
- (2) 学んだことを基に、活用する力を伸ばす指導の工夫
- (3) 理解や習熟の程度に応じた、きめ細かな指導の充実
- (4) 中学校と連携した授業の実践

Ⅲ 研究のポイント

1 提 案

◎活用する力を伸ばすための授業づくり

(1) 単元構成の工夫

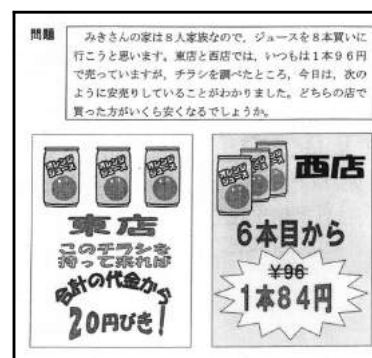
- ① 前単元あるいは前時に学んだ読み取りの方法を生かして、本時の読み取りの学習を進めていく単元構成 (国語科)
- ② 教科書教材以外の教材を取り入れた単元の構成 (国語科)
- ③ 単元の途中や最後に活用問題を組み込んだ単元の構成 (算数科)

(2) 実生活とのかかわりがある場や問題・教材の設定

- ① 買い物場面、学校生活、遊びの場面などの身近な場面の問題の設定
- ② 有用感を味わわせ、実生活への広がりをもたせる振り返りの工夫

(3) 学習環境の充実

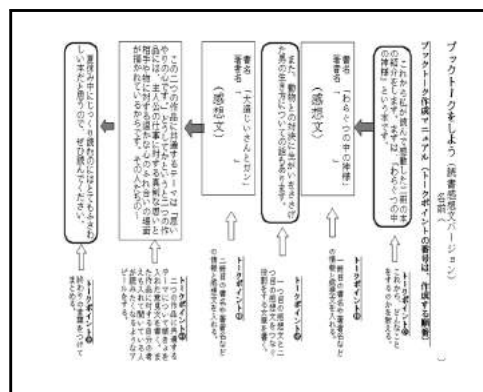
- ① 前時までに用いた教材を本時に活用していく導入の工夫
- ② 解決のヒントとして活用できる学習コーナーの工夫



買い物の問題 (3年算数)

(4) 書く活動の設定

- ① 字数や使用する語句に条件を付けた書く活動
- ② 学び合いをした後で、自分の考えを整理し深めるための書く活動
- ③ 図鑑や絵本づくりなどの楽しみながら書く活動
- ④ 問題文を図式化する活動
- ⑤ 自分の考えを筋道立てて説明できるようにするためのノートづくり



ブックトークマニュアル (6年国語)

(5) 言語活動と算数的活動の充実

- ① 取材活動の充実のための取材用紙の工夫
- ② ブックトークマニュアルの作成
- ③ 学習形態の特性を生かした学び合いの充実

2 成 果

- (1) 活用する力を伸ばす授業を設定するに当たり、教師が本時（単元）の基礎・基本をより明確にして取り組むようになった。
- (2) 実生活とかかわりのある問題や題材を取り上げることで、児童の学習意欲が高まり、学習を生活と関連付けて考えることができるようになった。
- (3) 学習コーナーを充実させることで、既習事項の何を使うと解決できるのか、児童が判断できるようになってきた。
- (4) 自分の考えを書く活動を大切にすることで、思考が整理されたり深まったりし、充実した学び合いができるようになってきた。

IV 研究の具体

1 全国学力・学習状況調査の結果分析

- (1) 全体の傾向
 - ・国語はA・B問題共に良好な状況である。国語に比べると、算数に課題が見られる。
 - ・活用する力は、昨年より伸びてきているが、まだ課題が多い。
- (2) 国語科の実態
 - ・資料から必要な情報を取り出し、効果的に書く能力が不十分である。意見文を書くために、文章を比べて読み、文章全体の組み立ての違いをとらえる力がやや足りない。
- (3) 算数科の実態
 - ・面積の量感、図形の発展的な問題、与えられた情報を整理して考え、式や算数用語を用いて記述する力が不十分である。複数のグラフから判断して問題を解決する力が弱い。
- (4) 児童質問紙からの実態
 - ・起床時刻、就寝時刻、朝食、テレビやゲームの時間など、基本的な生活習慣について、家庭と連携して改善していくべき点がある。
 - ・B問題の時間不足に対して、長文や複数の資料をすばやく読み取る力を伸ばす必要がある。

2 活用する力を伸ばす年間指導計画の作成

国語科と算数科において、従来の年間指導計画に活用する力を伸ばす学習を位置付け、明記した。国語科では話すことと書くことの言語活動を重視し、算数科では実生活とかかわらせた場の設定と算数的活動を重視して作成した。

3 活用する力を伸ばすための授業づくり

(1) 単元構成の工夫

- ① 国語科では、前単元あるいは前時に学んだ読み取りの方法を生かして、本時の読み取りの学習を進めていく単元の構成にした。教科書教材の他に同一作者の別の読み物を用いたり、学年に応じて書き下ろして用いたりした。

- ・1年：「どうぶつの赤ちゃん」の単元では、教科書教材と同一作者増井光子作「どうぶつの赤ちゃん（キリン）」の文章を教科書教材を基に書き下ろした「キリンの赤ちゃん」の読み取りを設定
- ・6年：教科書教材以外の宮沢賢治の作品「いちょうの実」の読み取りを設定

- ② 算数科では、単元の途中の区切りとなる部分や単元の最後に活用問題を加える構成を工夫した。

(2) 実生活とかかわりがある場や問題・題材の設定

- ① 算数科において、買い物場面、学校生活、遊びの場面など、より身近な場面の問題を設定した。

- ・2年：「ひき算のひっ算」では、お店をつくり、買い物場面を設定した。児童はひき算の問題づくりの学習を意欲的に行うことができた。

- ・5年：「百分率とグラフ」では、学校生活の中から、あいさつ運動の標語募集の場面を設定し、応募数を割合で求めたり割合から人数を求めたりする問題を作成した。自分たちが1位になるための必要最低限の人数を求める問題に、児童は意欲的に取り組んだ。

② 振り返りの工夫

- ・3年：「かけ算の筆算」では、終末の振り返りで、実際のスーパーのちらしを提示し、本時の算数の学習が実生活に役立つことを実感させた。

(3) 学習環境の充実

- ① 前時までの学習に使った掲示物を用いて導入の仕方を工夫したり、単元を通してキーワードとなる習得させたい重要な語句や式を掲示し繰り返し使ったりして、学習内容を児童に印象付けた。



お菓子屋を設定（2年算数）

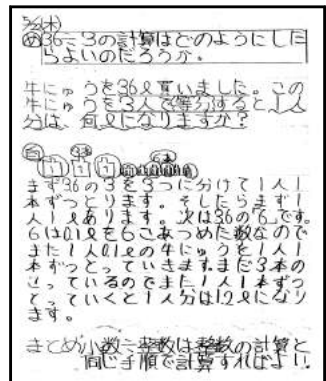


自作教材（1年国語）

- ② 学習コーナーには、単元の指導計画や基礎・基本となる内容を掲示した。また、算数の学習のために、学習過程の「深める」段階での考え方と説明の仕方を掲示した。児童は学習コーナーを参考にしながら既習事項の何を使うと解決できるのか判断できるようになり、自力解決の意欲も高まった。

(4) 書く活動の設定

- ① 自分の考えを筋道立てて説明できるようにするためのノートづくりを工夫したことで、考えの根拠や理由、基になる考え方を書くことができるようになった。
- ② 多くの児童は問題把握の力が足りず、文章問題を苦手としている。与えられた条件を理解するために、問題文を図式化する活動を取り入れたことで、問題を把握する力が付いてきた。
- ③ 低学年では、図鑑や絵本づくり、クイズづくりなど、読みを生かして楽しみながら書く活動が確かな読み取りに有効であった。また、高学年では、学び合いをした後での書く活動により、自分の考えを整理し深めることができた。



自分の考えを書いたノート
(算数5年)

1年「じどう車くらべ」では、教科書教材により仕組みと働きについて学んだ後で、身近な道具調べの仕組みと働きの文づくりを行った。児童は、文章の構成の仕方に気付いて書くことができるようになった。

(5) 言語活動と算数的活動の重視

- ① 登場人物の気持ちや会話を想像して吹き出しに書くことや読み取りを基にしたクイズづくりを行った。
- ② 新聞の見出し集めや5W1Hを項目にした取材用紙の工夫により、取材活動の充実を図った。
- ③ ブックトークマニュアルを作成することにより、読書感想文の充実を図った。
- ④ ペア、グループ、全体など、学習形態の特質を生かして学び合いの充実を図った。
- ⑤ 算数の学習に問題づくりを取り入れた。

4 中学校と連携した取り組み

(1) 「家庭学習充実のための三つの花」の作成

- ・小学校から中学校までの家庭学習の継続について、リーフレットを小・中連携して作成し、家庭への啓発を図った。

(2) 小・中連携の授業実践

- ・5年算数「分数をくわしく調べよう」では、中学校の数学教師とのTTを実践した。中学校数学でのつまずきの実態を考慮して単元を設定した。

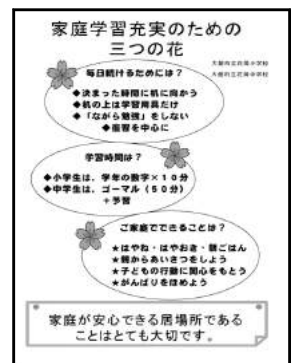
5 その他の実践

(1) 読書指導の充実

- ・読書に集中できる環境づくりのために、担任も一緒に読めるよう、読書の時間帯を変更した。読書の幅を広げたり、長い文章に積極的に触れさせるようはたらきかけている。
- ・読み聞かせサークル「ミラクルバナナ」による月1回の読み聞かせをしている。

(2) 朝学習の1C3Tによるチャレンジ学習の実施

- ・朝学習では担任以外の教師が週1日、各学級の指導に入るチャレンジ学習を実施している。



家庭学習の充実のために

V 課題とその改善

- (1) 活用する力を伸ばすための教材や学習問題の開発
- (2) 基礎的・基本的な内容のより確かな定着
- (3) 課題提示の工夫、発問の工夫、自力解決や学び合いのさせ方の工夫による、児童の思考力・判断力・表現力の向上
- (4) 家庭への啓蒙やTTによる授業実践など、家庭や中学校と連携した取り組みの継続

VI 研究実践を振り返って

本校では、活用する力を「習得した基礎・基本を用いて、自ら考え、判断、表現することにより、実生活や問題解決に生かす力」ととらえ、全職員で取り組んできた。活用する力を伸ばす授業は、まず、オリジナルの問題・教材を考え開発することから始まった。この問題開発が活用する力を伸ばす授業の鍵になった。この研究を通して、教師は単元や本時の基礎・基本をより明確にして取り組むようになり、児童は、的確に読み取り自分の考えを書くことができるようになってきた。また、解決の見通しをもって考えることができるようになってきた。今後もより一層の授業改善に取り組み、思考力・判断力・表現力を高める豊かな学びを目指していきたい。

研究主題

確かな学力を育成するための学習指導の工夫・改善 ～ 基礎・基本を身に付け、学習意欲が高まる授業の創造 ～

大館市立花岡中学校 校長 庄司 裕見子

I 学校の概要 (平成20年5月1日現在)

	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特別支援学級	計	教員数
学級数	1	1	1					3	1 2
児童数	1 8	3 0	2 2					7 0	
学校のホームページアドレス					http://www7.ocn.ne.jp/~hana-jhs/				

II 取り組んだ課題

- (1) 基礎学力の確実な定着を図る「分かる授業」の実現
- (2) 活用する力を伸ばす授業の創造
- (3) 校種間の連携に基づいた授業の充実

III 研究のポイント

1 提 案

◎「分かる授業」・「できる授業」を目指す授業改善の推進

- (1) 全国学力・学習状況調査の分析による各教科の実践課題の焦点化
 - ①市内全中学校の小問ごとの平均通過率(速報値)との比較→課題の明確化
 - ②「主として活用」の抽出問題の分析 → 出題傾向、他教科の学習内容との関連
- (2) TT, 少人数学習の推進

加配教員の配置を生かし、数学、理科、英語の3教科でTT・少人数学習を行っている。2, 3年生を半分ずつに分けることで、4つの授業が同じ時間帯に進められるように時間割を工夫している。(右表参照) さらに、週に1時間程度は、少人数学習に加えて、教科外の教師がT2として指導できるようにしている。1年生の英語は、少人数学習を行っていないが、すべての授業でTTを実施している。

時間割の工夫

	連続する テープ番号	
2年①	理科	数学
2年②	数学	理科
3年①	数学	英語
3年②	英語	数学

TT・少人数学習の 実施教科(各学年)

1年: 数学, 英語
2年: 数学, 理科, 英語
3年: 数学, 理科, 英語

- (3) 全教科による研究授業の実施

教科の枠を超えた授業研究が行われるように、「学習意欲の向上」と「終末段階での学習のまとめ」の2項目に絞って授業の視点を設定した。そして、授業研究会では、全教科ともに共通の視点に沿って研究協議を行うようにした。

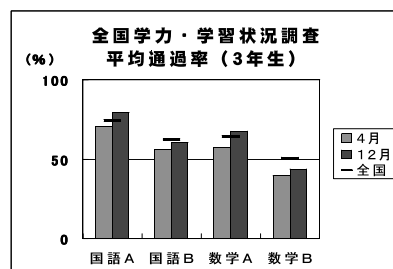
- (4) 「本時のまとめ」にかかわる全教科での共通実践

全教科での共通実践として、本時の学習で「分かったこと」「できたこと」を短文でまとめ、発表する活動に取り組んだ。授業を振り返り、自分の考えを簡潔にまとめることを繰り返すことで、思考力や表現力を高めることをねらいとしている。教師にとっては授業を自己評価する手立てとなり、生徒にとっては自己の変容を確認する手段となった。

2 成 果

(1) 生徒の実態に応じた「分かる授業」・「できる授業」の実現と学習意欲の向上

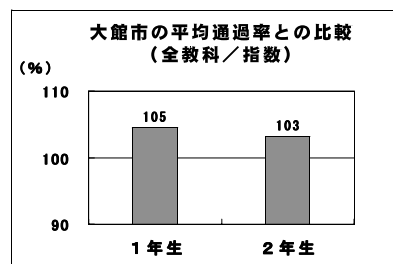
生徒の実態や課題を踏まえ、生徒の興味・関心を引き付ける資料や個別の学習を充実させる教材・教具を工夫した。また、生徒が情報交換や意見交流できる学び合いの場を意図的・計画的に設定した。そうすることにより、生徒の学習意欲を高め、確かな学力の定着を図ることができた。



全国調査の通過率の推移（4月・12月）

(2) 個別指導の充実

T T、少人数学習など、個に応じた指導の推進を図ったことにより、生徒の学習の達成状況を的確に把握し、下位の生徒を中心とした個別指導に生かすことができた。その結果、各教科において課題解決に向けて粘り強く取り組もうとする生徒の姿が見られるようになってきた。



県学習状況調査の結果から

IV 研究の具体

1 「基礎学力の確実な定着を図る『分かる授業』の実現」にかかわる実践

(1) 全国学力・学習状況調査の分析による各教科の実践課題の焦点化

生徒の実態に基づいた研究実践を行うため、全国学力・学習状況調査をはじめ、諸検査の分析結果を全職員で共有できるようにした。全国調査にかかわる研修会の流れは、以下の通り。

- ① 国語科・数学科の教科担任からの分析結果の報告
- ② 解答状況、小問別通過率をもとにした本校生徒の課題把握（協議）
- ③ 「主として活用」の抽出問題の分析
解答状況に特徴が見られる問題を抽出し、教職員が実際に問題を解いてみた。出題傾向をとらえ、他教科の学習内容との関連をとらえるとともに、複数の教科担任の視点で考察し、活発な意見交換がなされた。
- ④ 【事後】各教科における課題解決のための具体的実践事項のまとめ（各教科担任）

(2) T T、少人数学習の推進

数学、英語が得意な生徒が多いという実態を踏まえ、この二教科を中心としたT T、少人数学習に取り組んだ。教師の目が一人一人の生徒に行き届くので、学習状況の見取りやつまずいた生徒への支援がしやすい。また、生徒にとっては教師や友達に分からないところを質問しやすいので、苦手な教科の授業にも安心して取り組むことができた。

T T、少人数学習の実施教科（各学年）

1年生	数学：少人数またはT T [教科担任＋教科担任] 英語：T T [教科担任＋他教科担任]
2年生	数学：少人数 [教科担任] 理科：少人数＋T T [教科担任＋教頭] 英語：T T [教科担任＋他教科担任]
3年生	数学：少人数＋T T [教科担任＋他教科担任] 理科：T T [教科担任＋教頭] 英語：少人数＋T T [教科担任＋他教科担任]

※下線部：一部の授業のみ実施

(3) 全教科による研究授業の実施

- 【授業の視点】 ①生徒の学習意欲が高まるような学習活動の工夫が見られたか。
②終末段階での授業のまとめ（振り返り）は適切であったか。

今年度行われた8回の授業研究会では、全教科共通の授業の視点に沿って研究協議を行った。授業のねらい・学習課題・まとめ（振り返り）の整合性を意識して授業研究を進めてきたことで、教科の枠を超えた相互批評が活発に行われるようになった。そして、多面的な授業研究が行われることで、教職員の共同研究の意識も高まった。本時のねらいを焦点化することで、各教科ともに学習課題を設定する際に、今まで以上に授業後の生徒の姿を具体的にイメージするようになった。



理科「電流のはたらき」の研究授業（2年生）

2 「活用する力を伸ばす授業の創造」にかかわる実践

(1) 全教科での共通実践

自分の考えを整理して分かりやすく伝えることを苦手になっている生徒が多いため、学習課題に対するまとめ（振り返り）を文章で書き表し、発表する活動に継続して取り組むことにした。1時間の授業を振り返り、考えたことを簡潔にまとめることを繰り返していくうちに、書くことへの抵抗感が薄れ、次第に短時間でまとめることができるようになってきた。研究を進めるうちに、文章でまとめやすい教科とそうではない教科があることが分かってきた。そこで、数学科や英語科では、確認テストや練習問題など、異なる手法で取り組んでみた。また、実技教科では、学習課題に対する個人の取り組みを評価させるなど、教科の特性を生かした実践を積み重ねることで、成果を上げることができた。

(2) 各教科での実践

昨年度までの経営計画を見直し、具体的施策の内容をより明確に示すようにした。具体的な実践内容については、長期休業中（夏・冬）の校内研修会で報告と情報交換を行っている。他教科の指導方法から学ぶことも多く、教職員が互いに授業を参観して、助言をする「ミニ研究授業」とともに、実践交流の場となっている。

各教科の経営計画（様式）

【研究主題】

【具体的施策】（それぞれ2項目程度）

- ・基礎的・基本的事項の確実な定着
- ・個に応じた指導の工夫
- ・「活用する力」を育成するための指導の工夫

V 課題とその改善

- (1) 授業の中での反復練習がやや不足している。基礎・基本を定着させるための手立てに甘さが見られるので、授業の中で身に付けさせたい部分を確実に押さえた授業づくりを進めていきたい。
- (2) 発展的課題の提示は一部の教科で行われているが、全体としては不十分である。上位の生徒を伸ばすためにも具体的な手立てを講じていきたい。また、「活用する力」を伸ばすことを視点とした授業改善にも引き続き取り組んでいきたい。
- (3) TT、少人数学習をさらに効果的に進めていくためにも、単元全体を見通した学習形態の工夫が求められる。教科によっては週1時間程度のTTとなっているため、一定期間継続して行えるような体制づくりを進めたい。

VI 研究実践を振り返って

1年間という限られた期間での研究指定であったが、「授業改善」と「学力向上」をキーワードに、全職員が教科の枠を超えて一丸となって研究を進めることができた。そして、学校活性化に向けた大きな一步を踏み出せたことが、本校にとって一番の収穫であった。

研究主題

基礎学力の向上と学ぶ意欲を高める学習指導の充実 －読解力や活用する力を伸ばす指導方法の工夫－

能代市立能代第一中学校 校長 三田 裕

I 学校の概要 (平成20年5月1日現在)

	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特別支援学級	計	教員数
学級数	3	3	2				0	8	1 8
生徒数	7 4	9 4	6 5				0	2 3 3	
	学校のホームページアドレス				http://www.shirakami.or.jp/~icchu1/				

II 取り組んだ課題

- (1) 基礎学力の確実な定着を図る「分かる授業」の実現
- (2) 活用する力を伸ばす授業の創造
- (3) 理解や習熟の程度に応じたきめ細かな指導の充実（理解や習熟の程度の高い生徒への効果的な手立ての工夫や発展的な学習の在り方を含む）

III 研究のポイント

1 提 案

課題(2) 活用する力を伸ばす授業の創造における基本的な考え方

「活用する力」を伸ばすためには、活用の方法を教えた上で、活用の機会をつくる必要がある。

活用の方法 : 各教科における思考のプロセスが身に付くような授業の工夫
活用の機会 : 活用型の授業の実施

【実践事例】

既習の学習内容を生かして表現する授業 国語 1年『たろっぺ』に挑戦しよう

能代山本地区では、小・中学生を対象とする生活詩集『たろっぺ』発行を半世紀以上にわたって続けており、中学生にとっては、詩作に挑戦する好機となっている。

しかし、生徒の実態を見ると『たろっぺ』が求めている身近な素材の発見や、中学生らしい表現の工夫、連の意識、言葉の吟味などの点で、推敲を繰り返さなければならず、その間に意欲が失われてしまうことも予想された。そこで、図1のような単元構成を考えた。

この事例では、詩の創作という活用型の学びを単元の後半に設定しており、生徒同士がお互いの作品を批評し合い、作品の質を高め合う場面を期待している。その前段として、**架空の人物へのアドバイスという場面をつくることで、既習事項を想起させるとともに、相手を傷付けずに自分の意見を伝える方法を学ばせている。**このように活用型の学びの前には、活用の方法を教えることが大切である。

創作の前に『たろっぺ』の材料となりそうなことを探す。生徒の生活空間「地域・学校・家庭」の中から全員が共通して体験できる「学校」の場を選んで、材料を出し合う。

二つの詩のサンプルを読み、そのよさや改善すべき点をグループで出し合い、更に学級全体で発表し合う。

どちらかの作品の作者（架空の人物）に対して、発表によって確認した事柄の中からいくつかの項目を使って、アドバイスカードを書く。

生活詩を書き、グループ内でアドバイスカードを交換する。カードの中から、自分の改善すべき点を見付け、推敲する。

活用の方法を教える

活用の機会

図1 単元の流れ

2 成 果

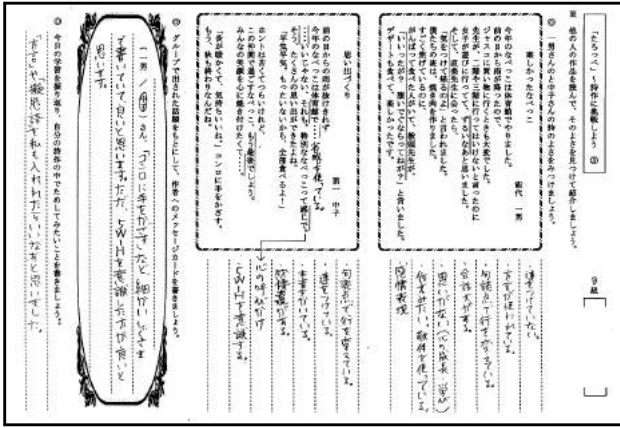


図2 学習シートへの記述

サンプルの詩を批評し、架空の人物へのアドバイスを書くという学習をしたことによって、単元後半の学習の質が高まった。

生徒の変容

お互いの作品を批評することによって、自分の作品の参考にしたり、多様な語句について理解を深め、題材のとらえ方や構成等を学び合ったりすることができた。

また、批評する際の視点として、詩の学習や「書くこと」の学習を振り返り、既習の内容を生かしてアドバイスカードや自分の作品に表現することができた。

IV 研究の具体

1 主題設定の理由

本校では、平成18年度から学校教育目標を「自ら学び自ら考える力や態度の育成 ―知行合一を目指して―」と改め、今年で3年目を迎えている。この目標の下で、研究主題として「基礎学力の向上と学ぶ意欲を高める学習指導の充実」を掲げ、実践を積み重ねてきた。今回、県の研究課題として示されたものは、そのまま本校の課題でもあったが、研究課題(2)については、あまり研究が進んでいなかった。そこで、副題として「読解力や活用する力を伸ばす指導方法の工夫」を掲げ、全教科・全職員で取り組むことにした。

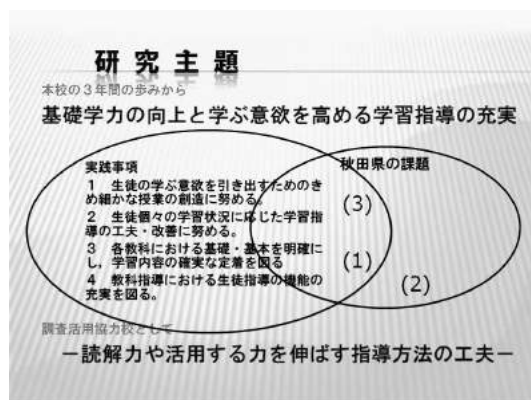


図3 研究構想図

2 研究概要

課題(1)～(3)に対する基本的な考え方と、共通実践事項は次の通りである。

課題(1) 基礎学力の確実な定着を図る「分かる授業」の実現	
基礎学力のとらえ方	共 通 実 践 事 項
1 各教科の基礎・基本	① 本時のゴールを明確にした授業づくり (ねらいと指導と評価の整合を図る。)
2 基礎的な読解力	② 基礎・基本定着のためのドリルの実施
3 学習スキル	③ ノート指導や学習シートの工夫、構造化
「分かる授業」を実現するためには各教科の基礎・基本に加えて、基礎的な読解力や学習スキルを身に付けさせるための手立てが必要であろう。	① 各教科における読解力の指導
	② 朝読書での読み取りプリントの実施 (通常の朝読書＋週1回程度のプリント)
	③ 家庭学習のスキルアップ指導 ・かがやきタイム(特設7校時)での指導 ・学級担任や教科担任による継続的な指導
課題(2) 活用する力を伸ばす授業の創造	
活用する力を伸ばすための方策	共 通 実 践 事 項
1 活用する力と評価についての研修	① 活用する力についての校内研修会の実施 ・中教審報告、新学習指導要領、国語、数学B問題、秋田大学浦野教授の講話
「活用する力」を伸ばすためには、活用する方法を教えた上で、活用機会をつくる必要がある。	② 活用する力の評価問題の作成(試行)
	・国社数理英の5教科で活用する力を測る問題を自作し、定期テストに1～2問出題する。さらに、授業の評価問題や小テストなどにもつなげ、実践の日常化を図る。

2 各教科における思考のプロセスが身に付くような授業の工夫	① 日々の授業の中で、各教科における思考のプロセスが身に付くような授業構成の工夫をする。
3 活用型の授業の実施	① 観察・実験やレポートの作成、論述等各教科で身に付けた知識を活用する学習を取り入れる。 ② 実生活に結び付いた教材の工夫を図る。
課題 (3) 理解や習熟の程度に応じたきめ細かな指導の充実（理解や習熟の程度の高い生徒への効果的な手立ての工夫や発展的な学習の在り方を含む）	
基 本 的 な 考 え 方	共 通 実 践 事 項
生徒の実態に合った学習課題を用意し、適切な支援を行うことによって、どの生徒も1時間いっぱい集中して授業に取り組むことができるであろう。	① 学習状況に応じた支援の方法を明確にする（学習指導案にも明記する。） ・評価規準に到達させるための支援を工夫する。 ・評価規準に到達した生徒への発展的な課題を準備する。 ② 少人数グループでの学び合いの推進 ③ TTの工夫（主として数学、英語） ④ 自己評価カード等生徒理解の工夫

3 特徴的な取り組み

(1) 基礎的な読解力を培う意図的な読書指導 【課題 (1) 項目2-②】

本校では、原則として週4回、15分間の朝読書を実施している。従来は生徒たちが読みたい本を持参する形式であったが、このうちの1回を教師が用意した読書プリントを読む形に改めた。読書プリントに取り上げる材料は、主に新聞記事を活用している。なぜならば、本文のほかに図や表を含んでおり（いわゆる非連続型テキスト）、情報の読み取り能力を育てることに適しているからである。これに簡単な質問を1～2問付け加えて1枚のプリントをつくり、基礎的な読解力の向上をねらってきた。

(2) 各教科における思考のプロセスが身に付くような授業【課題 (2) 項目2】

新しい学習指導要領の総則には「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむ」とある。活用の趣旨はここにあるわけだが、明確な意図もなくただ活用させているだけでは、各教科でねらっている思考力等が身に付くとは考えにくい。

本校では、「問題場面に出会ったときから解決に導くまでの考え方」を生徒に身に付けさせることが活用の土台になると考えている。例えば、数学では本時の振り返りにおいて「問題を解くことができたか」だけでなく、「今日の学習においてどんな考え方を身に付けたか」を生徒に意識させている。このように、「活用」を意識した授業構成を考えることが日常の授業改善につながってきた。

V 課題とその改善

- (1) 実質、半年間という研究期間はやはり短かく、今年度は「活用」の位置付けをはっきりさせ、研究の方向性が見えたところで終わってしまった。今後は、この研究を基盤としながら、より確かな実践を積み重ねていきたい。
- (2) 生徒個々の学習状況に応じたきめ細かな指導によって、全体的なレベルアップは図られたが、そのことによって逆に個人差は拡大している。特に正答率が低い層をさらに引き上げるために家庭との連携方法を一層考えていく必要がある。また、家庭学習の仕方等、学習スキル面で小学校と連携しながら改善を図ることができないか、検討していきたい。

VI 研究実践を振り返って

本校において、今回の研究の中心は「活用」であった。「活用」という用語は日常的にもよく使われるためか、言葉が一人歩きしている感があったが、この研究指定に取り組んだことで、考え方が整理されてきた。そしてまた決して新しい概念ではなく、これまでの実践の中にもあった考え方であることが分かった。ただし、今までは「活用」という意識が不足していたかもしれない。これからは、生徒に何を活用させるのか、活用させることによって何を身に付けさせたいのか、もう一度教科の目標にもどって再吟味することで確かな実践を積み重ねていきたい。

新しい学習指導要領でも「活用」は非常に重要視されている。今回の研究は、私たち教師の力量を高め、今後の実践につながる非常に有意義なものであった。

基礎学力の確実な定着を図る分かる授業をめざして

由利本荘市立下川大内小学校 校長 斉藤 英樹

Ⅰ 学校の概要 (平成20年5月1日現在)

	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特別支援学級	計	教員数
学級数	1	1	1	1	1	1	0	6	1 0
児童数	1 7	1 6	2 1	2 3	1 7	2 4	0	1 1 8	
	学校のホームページアドレス				http://www.ont.ne.jp/~simo-es/				

Ⅱ 取り組んだ課題

- (1) 基礎学力の確実な定着を図る分かる授業の実現
- (2) 校種間の連携に基づいた授業の充実

Ⅲ 研究のポイント

1 提 案

◎ 基礎学力の確実な定着を図る分かる授業の実現

〈キーワードに気付かせる支援〉

「読み取りのためのキーワード」「まとめるためのキーワード」という二つの視点を意識した授業を行い、読み取る際の手がかり、まとめるための条件として子どもたちがとらえることができるようにした。

(1) 読み取りのためのキーワード

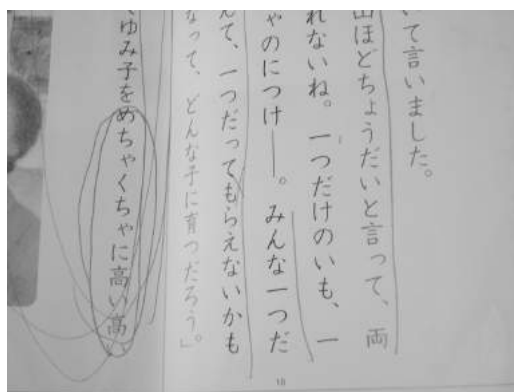
国語では、叙述に即して登場人物の心情をつかむために、「登場人物」「場所」「出来事」など、基本的な読み取りのポイントを指導し、絶対に落としてはいけないキーワードに気付かせるために、大事な言葉にサイドラインを引く学習活動を取り入れた。そして、それぞれがサイドラインを引いた言葉について、みんなで検討する時間を設定した。

また、算数では、「あわせて」「ちがいは」「ぜんぶで」「わかっていること」「求めること」などにサイドラインを引いて、演算決定をするための手がかりにできるようにした。

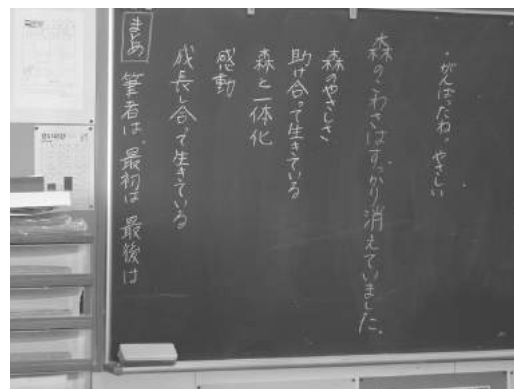
(2) まとめるためのキーワード

繰り返し出てくる言葉や「集約される言葉」などを「まとめるためのキーワード」としておさえ、自分の言葉でまとめさせる活動を設定した。

また、本校の課題である「説明する力」を向上させる取り組みとしても、説明する時の大切な言葉として、既習事項の算数用語や「百のまとまり」「くり上げ」などの言葉をキーワードとして使えるように支援した。そして、クラスみんなに分かりやすく伝えることができるようにして、自分の考えを確かなものにしていく学び合いの時間の充実につなげていこうとした。



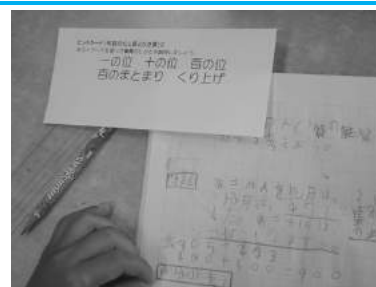
サイドラインを引いた教材文



キーワードでまとめる国語「森へ」の授業

2 成 果

「キーワード」という言葉が子どもたちに定着してきて、サイドラインやアンダーラインを引きながら課題解決に向けて考える子どもたちの姿が見られるようになってきた。国語では、読み取りに必要な言葉を、算数では、演算決定に必要な言葉をキーワードとして認識できるようになったことは大きな成果である。また、子どもたちが自分たちで考え出した言葉をキーワードにしているのも、その後の理解、定着につながってきている。キーワードを使って、分かりやすくみんなに説明しようとする姿が見られるようになった。



キーワードでまとめる

IV 研究の具体

1 基礎学力の確実な定着を図る分かる授業の実現

(1) 具体的な研究内容

① キーワードに気付かせる支援

課題解決のための視点を与えるために、「サイドラインやアンダーラインを引く」「大事な言葉を○で囲む」などの学習活動を必ず取り入れ、「読み取りのためのキーワード」「まとめるためのキーワード」を意識させるようにして、言葉にこだわる姿勢をつくっていった。

② 考えたことを自分の言葉で書く活動の設定

「自分の考えをまとめる時間を保障する」とことと併せて、まず「自分の考えをもたせる指導の工夫」を目標に掲げ、「○か×を決めさせ、その理由を簡単に書かせる」「四つの中から一つを選ばせ、その理由を書かせる」など、それぞれの学年に合った指導が行われた。「書き出しの言葉」やヒントを与えて書かせたり、ペアやグループでの話し合い活動を通して、「友だちの考えに触れる時間」を設定したりして、書くことに対する抵抗感を小さくした。

③ 自分の考えを確かなものにしていく学び合い活動の工夫

自分の考えが正しいかどうかを全員で学び合いながら、修正したり考えを深めたりすることで、学習内容の深い理解を目指していくことにつなげていきたいと考え、ペアや少人数グループでの学び合いの場を設定して全員が説明できるようにしたり、多様な考えを引き出し、学び合いの方向性を決める発問を工夫したりした。

(2) 成果と検証

- ① 読み取る際の手がかり、まとめるための条件として、「キーワード」という言葉が子どもたちにも定着してきて、演算決定や読み取りに生かされてきた。サイドラインを引くなど、具体的な学習行動として示したことで、一つの学習スキルとして、子どもたちに定着し、言葉にこだわる姿につながっていったものと思われる。

〔資料1〕3年生以上に実施した「生活・学習アンケート」から

質 問 項 目	5 月 (%)	11 月 (%)	変 化 (%)
「国語の授業の内容がよく分かる」	32.5	43.5	11.0 ↑
「国語の授業で文章を読むとき、段落や話のまとまりごとに内容を理解しながら読んでいる」	26.8	41.2	14.4 ↑
「算数の授業の内容がよく分かる」	50.6	54.1	3.5 ↑
「算数の問題の解き方が分からないときは、あきらめずにいろいろな方法を考えている」	49.4	56.5	7.1 ↑
「算数の授業で問題を解くとき、もっと簡単に解く方法がないか考える」	41.0	51.8	10.8 ↑

- ② それぞれの学年に合ったいい指導・支援が行われ、自分の考えをノートや学習シートに書くことに対する抵抗感が少なくなり、自分なりの考えをもって課題や友だちの考えにかかわろうとするようになった。そのため、理由や根拠を入れて自分の言葉で書くことができる子どもが多くなり、みんなによく分かるように説明しようとする子どもが多くなった。

〔資料2〕3年生以上に実施した「生活・学習アンケート」から

質 問 項 目	5 月 (%)	11 月 (%)	変 化 (%)
「国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている」	1 6 . 9	3 5 . 3	1 8 . 4 ↑
「国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気をつけて書いている」	7 4 . 7	8 7 . 0	1 2 . 3 ↑
「算数の授業で公式やきまりを習うとき、そのわけを理解するようにしている」	3 6 . 1	5 4 . 1	1 8 . 0 ↑
「算数の授業で問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いている」	5 0 . 6	6 5 . 9	1 5 . 3 ↑

- ③ 友だちとのかかわりの中で、学び合いを楽しむ姿勢が見られるようになってきた。今年度大事にしてきた「説明する力」についても、ペアやグループ、そして、クラス全員に分かるように話そうとする意欲的な姿が多く見られた。また、発問の工夫や、自分の考えを必ずもって授業に臨む学習習慣が確立したことも加わって、多様な考えを出し合いながら、正しいものを考え出す学び合いになってきたことも今年度の取り組みの成果である。

2 校種間の連携に基づいた授業の充実

(1) 具体的な研究内容（予習的な家庭学習、復習的な家庭学習を意識した指導）

学習単元教材の音読、関連した作品やシリーズ物、同一作者の作品の読書を奨励したり、分からない言葉の意味や教材文に関連したことを調べる予習をさせ、語彙の獲得を図ったり物語の時代背景を理解しやすくしたりするようにした。また、算数では、その日の学習したことの定着を図るために問題の解き方の説明を書かせたり、類似問題を練習させるなど、復習を徹底してきた。毎月、家庭学習強調週間を実施し、時間や内容を充実させたり、ポイントを絞って意識付けを図ったりした。

(2) 成果と検証

国語では、学習している教材文の音読を徹底したことや、家族からの聞き取り調査などを家庭学習として行ったことで、教材文の正確な読み取りにつながってきている。同一作者の他の作品の読書を奨励することで、作者の作風や思い、願いをより深く感じ取ったり、語彙を増やしたりすることにつながった。算数では、その日に学習した問題の解き方や計算の手順を家庭でも同じように文章で書かせたり、ドリルやプリントで問題練習をさせたりすることで定着が確かなものになり、子どもたちが自信をもつようになってきた。

V 課題とその改善

(1) 基礎学力の確実な定着を図る分かる授業の実現について

「垂直」「平行」「四角形の名前」「商」「積」などの基本的な算数用語を忘れてしまい、演算決定するために必要なキーワードとしてとらえることができない。各学年で必ずおさえておくべき大事な学習用語としてピックアップし、機会を作って定着するように繰り返し指導したり、教室掲示を工夫し、子どもたちの目に触れる機会を多くするとともに、授業の中で、既習の用語を想起したり、使ったりする場面を増やしていきたい。

(2) 校種間の連携に基づいた授業の充実について

国語では、その日の学習を復習できる類似問題のプリントを探したり、毎日自分で作成したりするなどの復習的な家庭学習、算数では予習的な家庭学習の取り組ませ方が難しい。国語では、「まとめ」で終わって解決する授業から、授業の後半には、子どもたちが、家庭学習において自主的に、意欲的に取り組みたいと思うような、新たな学習課題が生まれる学習過程をつくっていく必要があると思われる。算数では、教科書を活用した予習のシステムをつくり、「子どもたちの予習を前提とした授業づくり」が行われるような指導、支援が必要である。

VI 研究実践を振り返って

全国学力・学習状況調査の結果を積極的に活用し、研究主題達成のために、全校一丸となって研究を推進することができた。先生方一人一人が授業改善を意識して研究に取り組んだ結果、子どもたちの授業に対する姿勢が確かに変わってきたと感じられるようになった。由利本荘市教育委員会の指導をはじめとし、様々な方面の方々にもご協力いただき、成果を上げることができた。今年度の取り組みを継続し、子どもたちの学力向上につなげていきたい。

研究主題

子どもたち自らの力で創り上げる学習活動を目指して ～国語科・算数科における主体的な学びを求めて～

由利本荘市立上川大内小学校 校長 佐藤 千鶴

I 学校の概要 (平成20年5月1日現在)

	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特別支援学級	計	教員数
学級数	1	1	1	1	1	1	0	6	8
児童数	7	1 7	1 3	1 1	1 2	2 2	0	8 2	
学校のホームページアドレス				http://www.ont.ne.jp/~kamisho/					

II 取り組んだ課題

- (1) 基礎学力の確実な定着を図る分かる授業の実現
- (2) 理解や習熟の程度に応じたきめ細かな指導の充実
- (3) 校種間の連携に基づいた授業の充実

III 研究のポイント

1 提 案

◎児童の実態把握と支援の明確化

個人差に対応し、基礎・基本の定着を図ることが本校の課題である。そのため、既習事項等の実態把握と個への支援の明確化に努め、授業改善を行った。

(1) 各種調査の分析、アンケート、レディネステストによる実態把握

- ① 全国学力・学習状況調査、県学習状況調査、NRTの分析を行い、児童の実態を把握し、単元のねらい、指導方法の改善に生かしていく。
- ② アンケートの実施により、学習に対する児童の意識を把握し、意欲を喚起する学習活動を工夫する。

(2) 座席表の活用による支援の明確化

- ① 学習の様子、発言の記録を行い、習熟の程度をつかむ。
- ② 前時の学習の様子から本時の支援を明らかにし、適切な支援を行う。

(3) チェックシート（単元評価カード）の活用

- ① 一単位時間ごとの評価規準に基づき児童の評価を記入し、指導方法の改善を行う。
- ② 個への指導の在り方を検討し、次単元に生かす。

5年松組 国語科「お松書店プレゼンツ！ かっこいい人のかっこいいところをかっこよく紹介します」 平成20年5月13日 4/14									
【授業概要】 読み・理解・態度 読んだことや考えたことを通して書いたり話したりしている。 読むこと (五) 白瀬さんの前作りや訂作りへの思いを読み取っている。 ①本時支援 授業の様子 白瀬さんの人物像のとりえ									
○キーワードになる文がある段落を教え、そこから考えさせる。	○大事な文に線を引くことはできたが、意図は通かった。 ☆古代の人に書けないようにもっていい訂を作ろうしている。努力する人。	関	話聞	書く	読む	言語	関	話聞	書く
○大事な文を見つけてくれた。 ☆訂をたくさんつくってほしい。		関	話聞	書く	読む	言語	関	話聞	書く
○キーワードになる文がある段落を教え、そこから考えさせる。	○話し合いではみんなの意見をうまく引き出していた。 ☆千年前の人に下手だと思われたくないという負けず嫌いな人だ。	関	話聞	書く	読む	言語	関	話聞	書く
○自分の考えに自信を持ってない。 ☆白瀬さんしかこんな訂は作れないだろう。負けず嫌いで意地がある人だ。		関	話聞	書く	読む	言語	関	話聞	書く

国語科の座席表

PDCAサイクルの実現

【授業前】Plan

- ・ 諸調査分析、アンケート、レディネステストの実施と実態把握
- ・ 支援の明確化と座席表の作成
- ・ ヒントカードの作成

【授業】Do

- ・ 個に応じた支援の実施
- ・ 学習の様子、発言の記録

【授業後】Check Action

- ・ 座席表、チェックシートへの評価の記入
- ・ つまづきが予想される児童への支援の明確化

2 成 果

諸調査、アンケート、レディネステストの分析による実態把握と、座席表を活用し、支援を明確にしたことで、自力解決できる児童が増え、学習に意欲をもって取り組めるようになってきている。アンケートの結果を見ると、授業の内容が分かるという児童が増えてきている。4月より各学級の課題を明らかにし、授業改善に当たった結果と思われる。

「授業の内容はよく分かりますか」		
	H 2 0 4 月	H 2 0 11 月
国語	7 6 . 1 %	8 6 . 3 %
算数	6 6 . 6 %	8 1 . 7 %

※当てはまる、どちらかといえば当てはまるの合計

授業に対する意識のアンケート結果

IV 研究の具体

1 基礎学力の確実な定着を図る分かる授業の実現

(1) 具体的な研究内容

① 自分の考えを書く活動の設定

- 算数科において既習事項を生かし、課題解決へ向けた段階を踏んだ記述の仕方の指導を行った。(接続詞の使用：はじめに～をして、次に～をして、そして～となった。番号の使用：①～、②～、③～、など)

② 考えをもたせるための支援の充実

- 目的意識をもった「読むこと」の指導の充実を図るため、言葉や表現に注目し、豊かな読みを創造する学習を展開する。(キーワード、キーセンテンスへの注目)
- 意欲をもって課題解決に向かうことができるよう、問題の提示の工夫と児童の声による学習課題づくりを行う。また、既習事項を活用して自力解決ができるよう、教室環境を整備したり、ヒントカードやヒントコーナーの準備をする。

③ 書いたことを有効に活用する話し合いの場の設定

- 相手の考えを受け止め、感想や意見を交流する場を意図的に設け、学び合う姿勢を重視する授業を行う。発言の際には、伝えたいことの中心が分かるよう根拠となる言葉(キーワード)や文(キーセンテンス)をはっきりとさせた発言の仕方の指導をする。ペアやグループなど学習形態を工夫し、考えを比べたり、見つめ直すことができるようにする。

(2) 成果

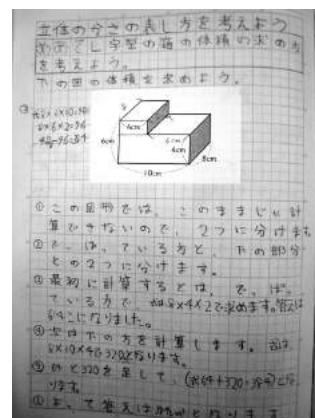
- キーワードを□や○で囲む、キーセンテンスを線や波線、色分けする等の作業によって、登場人物の心情や段落の内容を読み取ったりすることができるようになってきた。
- 低学年ではノートの拡大コピーの利用によって学習内容のまとまったノートを児童たちが書けるようになった。また、中・高学年では課題解決に向けた考え方・方法を接続詞や番号で記述する指導によって、考えを整理して順序立てて書ける児童が増えてきている。

2 理解や習熟の程度に応じたきめ細かな指導の充実

(1) 具体的な研究内容

① 学習内容や活動の段階での個に応じた指導の明確化

- 各種調査の分析、アンケート、レディネステストの実施による既習事項、学習に対する意識の把握を行い、支援を明確にしていく。



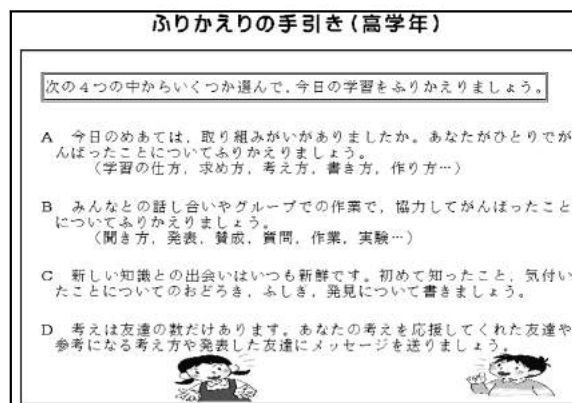
算数科 自力解決の記述

② 毎時間の自己評価や振り返りによる実態把握と次時の支援の明確化

- ・ 振り返りの時間を確保し、自己評価を次時の学習へ生かしていく。振り返り際には、「振り返りの手引き」を活用し、視点を明らかにすることで本時の学習を振り返ることができるようにする。

(2) 成果

- 教室掲示の工夫、前時の学習や関連事項の確認により、既習事項を生かしながら自分の考えをもてる児童が着実に増えてきている。
- 座席表の活用を重視し、単元の導入の際のレディネステストやアンケートの結果を生かしながら支援を考え、その時間の学習の様子を記入し、また次の支援へ生かすことで、学習のねらいに達成する児童が増えてきた。
- 振り返りの時間を設定し、視点を明確にした振り返りを行ったことにより、本時の学習内容の確認ができ、児童の次時への学習の意欲付けとなった。



振り返りの手引き

3 校種間の連携に基づいた授業の充実

(1) 具体的な研究内容

① 小・中連携による家庭学習の充実

- ・ 「家庭学習の手引き」「家庭学習のススメ」を活用し、学年の実態に応じた取り組みの時間の目安の設定や内容の充実を図る。月に一度、家庭学習強調週間を設け、保護者に協力をいただきながら学習内容の向上と学習の習熟を図ることができるようにする。

② 家庭学習の充実と基本的な生活習慣の定着のための保護者への啓発

- ・ 小中共通の項目でアンケートを実施し、結果を保護者と共有することで学力向上を図る。

(2) 成果

- 「家庭学習の手引き」「家庭学習のススメ」の活用により、学習に取り組む姿勢、学習内容の充実が見られるようになった。強調週間の実施によって、学習への取り組みに関して保護者の意識も高くなり、児童の意欲向上にもなった。
- アンケートの実施により、家庭での生活習慣・学習習慣についての本校の傾向をつかむことができ、改善に向けての保護者の協力を得ることができた。

V 課題とその改善

- ・ 既習事項が分かっているにもかかわらず、それを活用してノートに考えをまとめることができない児童や、自分の考えをまとめるのに時間がかかる児童が若干いる。児童一人一人が自力解決し、自信をもって考えを紹介できるよう、課題を明確にしたり、発問の精選、ヒントカードの更なる工夫をしたりする必要がある。
- ・ 自分の意見を伝えることはできるようになってきているが、友達の考えから自分の考えを見つめ直し、学び合うまでに至っていない。そこで、様々な考えから、有効な方法を引き出す話し合いの在り方を考え、学習形態の工夫改善を行うことで学び合う姿勢を育てていきたい。
- ・ 習熟の程度や課題解決の速さに個人差が見られるので、座席表の活用を工夫改善し、つまずきに対応する支援を考えていくことで、きめ細かな指導を充実させていきたい。

VI 研究実践を振り返って

本研究を実践していく中で、日々の授業の大切さを改めて実感すると共に、毎日の授業改善に向けた取り組みを行ってきたことにより、教師一人一人の授業力が確実に向上してきているように感じる。これは職員が「チーム上川」として、本校の課題を共通理解し、情報交換を大切にしながら協力し、一致団結して取り組んできた成果であると強く思う。

確かな学力をはぐくむ指導の工夫 ～基礎学力の定着と活用する力の育成を通して～

由利本荘市立大内中学校 校長 櫻井 茂和

I 学校の概要 (平成20年5月1日現在)

	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特別支援学級	計	教員数
学級数	1	1	1					3	1 1
生徒数	3 4	3 7	4 0					1 1 1	
学校のホームページアドレス					http://www.ont.ne.jp/~ouchijhs/				

II 取り組んだ課題

- (1) 基礎学力の確実な定着を図る分かる授業の実現
- (2) 活用する力を伸ばす授業の創造
- (3) 校種間の連携に基づいた授業の充実

III 研究のポイント

1 提 案

◎活用する力を伸ばす授業の創造

生徒が課題解決に向けて多様な取り組みができる教材を開発し、それぞれの解決方法話し合い、吟味する「学び合い」を通して活用する力を伸ばすことができると考えた。

(1) 活用する力を伸ばす教材の開発について

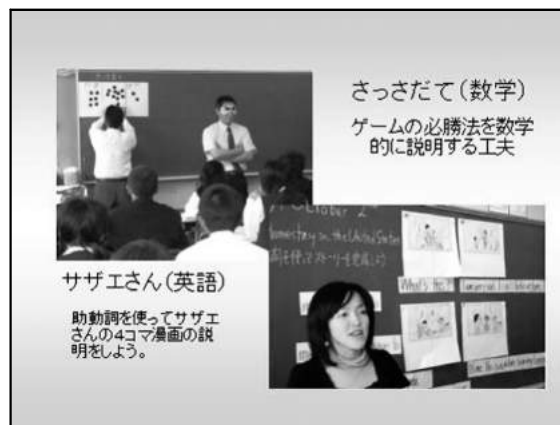
活用する力の育成を目指した教材のポイント

- ① 複数の資料を比較し、検討する学習が可能な教材
- ② 教科の力をもとに課題に取り組み、その解決方法を説明する学習が可能な教材
- ③ 日常の生活場面と学習のつながりが見える教材

(2) 「学び合う」場の設定について

課題に対し自分の考えをもち、互いの取り組みや考えを伝え合い、吟味する「学び合う」場の設定

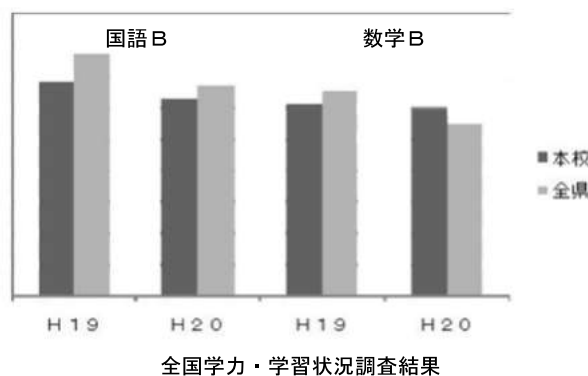
- ① 他の生徒とのかかわりの中で自分の意見や考えを深める場の設定
- ② 根拠をはっきりさせ分かりやすく説明する指導の工夫



活用する力を伸ばす授業への取り組み例

2 成果

「学び合い」を生かした授業を進めた結果、他者の意見を聞いて自分の考えと比較し、そのよいところを自分の考えに取り入れる生徒が見られるようになった。また、活用する力を伸ばす教材開発への取り組みを通し、日常生活と学習のつながりを意識したり、複数の資料を比較して考えたり、学んだことを多様な表現で生かそうとする生徒の姿が見られるようになった。全国調査の結果からも活用する力の向上が見られた。



IV 研究の具体

1 基礎学力の確実な定着を図る分かる授業の実現

(1) 学習する内容が一目で分かる 単元カードの工夫

単元カードに「学習課題や内容を明示して単元の学習の見通しをもたせる」欄を設けた。また、「評価のポイント」「他の人の意見を参考にして学習できたか。」など、生徒が確かな学習の振り返りができるように工夫した。さらに、活用する力の育成との関連から、他者から学ぶ意識を生徒にもたせたいと考え、「評価ポイントに対する振り返り」に他者から学んだことを書く欄を設けた。

単元カード「世界と日本の人口」

2A 春 名前

学習課題	評価ポイント	自己評価	評価ポイントについての振り返り
世界の人口には、どのような特色があるのだろうか。	世界の人口の特色を、説明することができる。 ほかの人の発表や考えを参考にして学習することができたか。	⑤ B C D ⑤ B C D	世界の人口が2年で3億人もふえたのはビックリしました。人口の増加、集中している所をおぼえてます。
日本の人口には、どのような特色があるのだろうか。	日本の人口の特色を、説明することができる。 ほかの人の発表や考えを参考にして学習することができたか。	⑤ B C D ⑤ B C D	人口は太平洋ベルトに集中している事と、人口が少子高齢化社会で、高齢者と子供の割合に変化があることがわかりました。
人口の過密地域と過疎地域には、それぞれどのような特色があるのだろうか。	人口の過密な地域の特色と、過疎な地域の特色を、それぞれ説明することができる。 ほかの人の発表や考えを参考にして学習することができたか。	④ B C D ④ B C D	社会生活が成り立たなくなったら大変。石炭がくま、と不便ですが、羽成は、夜更けまで起きてるって、ちょっとはイロがあるの、って、
単元のまとめ ワーク P26-29 点検 単元テスト	ワークのすべての問題を答え合わせして提出することができたか。 テストで自分の力を発揮することができたか。	A ⑤ C D A ⑤ C D	人口ロラミットから、どの国が考える問題がむずかしかったです。みんな人口の問題がわかりました。

学習課題や内容を明示して単元の学習の見通しをもたせる

評価ポイントに対する振り返り

評価のポイントを示して、自己評価に生かす

他の人の意見を参考にして学習できたか。

単元カードの例

(2) 成果と検証

単元カードについては、単元の学習内容やめあてを示したことによって、生徒は単元の学習についてどんな学習をするのかつかむことができるようになってきた。また、他者の意見と自分の意見を比べ、他の生徒の意見を単元カードの感想に書き加えている生徒が見られるようになった。評価ポイントをもとに本時の学習のまとめや振り返りを行うことで、本時で学んだことの定着が図られるとともに、学習にも落ち着きが見られるようになってきた。

家庭学習と単元カードを連携し、授業と家庭での学習を結び付けた活動も見られるようになっており、振り返りの感想に書かれた疑問やよい感想を次の時間の導入で紹介するなど授業のつながりを意識した学習を行うことができるようになってきている。

- ① $y = ax$ に x と y の値を代入して求めることが分かった。自分の考えを、友達がもっと分かりやすく説明してくれた。方程式よりも良いかもしれない。
(1年 数学 比例の式)
- ② 今日は、みんなの春のイメージを聞いて、自分で思っていたも、どう表現したらいいか分からないところを、みんなの意見を聞いて深められて良かったです。
(2年 国語 春に)

生徒の感想から

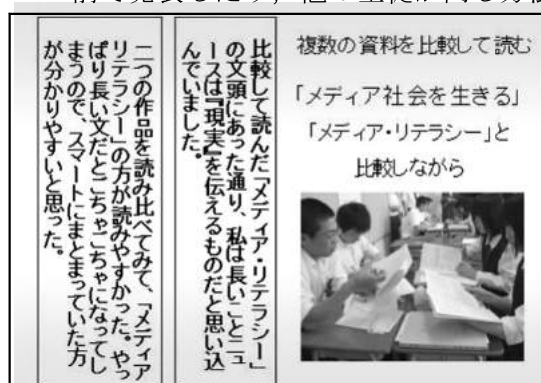
2 活用する力を伸ばす授業の創造

(1) 活用する力を伸ばす教材の開発と学び合い

数学科では2年生の連立方程式の授業で江戸時代のパズルを使い、その必勝法を数学的に説明する授業を行った。パズルの必勝法を連立方程式の考え方を使い説明することを通して、生徒は自分たちが学んでいることが実際の場面で生かされる実感をもつことができた。また、名人を登場させることで、複雑な解決法ではなく、かけ声の数と碁石の数の関係を見つければ容易に解決できることに気づき解決への意欲と見通しをもつことができた。さらに、小グループで碁石を使って解決の方法を話し合う活動を入れることで、どの生徒も解決に向けての活動に参加することが可能となった。最後に自分が発見した必勝法をみんなの前で発表したり、他の生徒が同じ方法で確かめたりする中で生徒は分かりやすい説明は何か、



2年数学 活用する力を伸ばす授業の取り組み



3年国語 活用する力を伸ばす授業の取り組み

説明するときには大切なことは何か考えることができた。

数学の他に、国語では複数の資料を比較し、表現の違いやメディアに対する見方を広げさせた。

また英語では、授業で習った助動詞を4コマ漫画の内容に当てはめて表現させるなど生徒の興味を引き出し、多様な表現を求める授業づくりに取り組んでいる。

日常生活と学習内容を結び付けることも、活用する力を伸ばす授業にとって大切である。家庭科では新聞記事や身近な飲料水のラベルを比べて見ることを通し、自分にとって一番安全な飲み物は何か判断する学習が行われた。

(2) 成果と検証

意見を聞き合う場面（個→小グループ→全体）が増加し、聞き合い、教え合う場面を通して理解を深める生徒の姿が見られるようになってきている。また説明で用いるキーワードや要点に線を引くなど、自分の説明や考えの根拠となる部分を見つける生徒も増えてきている。

他者との違いに抵抗感をもつ生徒の減少と、多様な実験方法や結果を認め合う中で「学び合い」の過程で知った新たな方法や解き方を評価問題で確かめ、理解を深めるようになってきている。

V 課題とその改善

(1) 単元カードにおける「自己評価の観点」の明確化と振り返りの共有化

評価のポイントに対し、自己評価（A・B・C）をしているが、どうすればAになるのか観点の具体化が必要である。そのために、「人口が増加した理由を3つ以上見つけることができればA」など自己評価する際に示すことで改善していきたい。また、単元カードに書いた振り返りについては時間内で紹介するなど、その日に学習したことをその場で共有化する時間を確保していきたい。

(2) 学び合いにおける話し合いの焦点化

調べたことを発表し、情報を聞き合う活動は増えてきたが、「どの考えが優れているのか」や「どこが違うのか」「なぜ正しいといえるのか」など、多様な意見や考えを集約する段階とその視点が求められている。授業者である教師が生徒の意見を予想し、どの意見を取り上げるのか生徒の意見をどのように結び付けるのか見通しをもつことで改善を図っていきたい。

VI 研究実践を振り返って

教科は違っても、生徒が課題に向かって積極的に取り組む授業には生徒が多様な解決方法を考えたり、自分の考えを他に伝えようとするなど、共通する点が多いことに気付かされた。また、全国学力・学習状況調査等の結果を日々の授業改善に生かす大切さを実感した1年でもあった。基礎学力の定着とともに、学んだことを日々の生活に生かす機会を増やし、活用する力の育成に向けて今後も研究を進めていきたい。

研究主題

分かる喜び，学ぶ楽しさを通して，生きる力をはぐくむ
～ねらいと評価の一体化を通して，確かな学力の定着を目指す～

大仙市立太田東小学校 校長 佐々木 公高

I 学校の概要（平成20年5月1日現在）

学校の概要（平成26年3月1日現在）									
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計	教員数 10
学級数	1	1	1	1	1	1	0	6	
児童数	22	19	18	23	24	28	0	134	
学校のホームページアドレス				http://www.edu.city.daisen.akita.jp/~ot-higashisyo/					

II 取り組んだ課題

- (1) 基礎学力の定着を図るための分かる授業づくり
- (2) 児童の実態に応じたきめ細かな指導のための環境づくり

III 研究のポイント

1 提 案

◎ねらいと評価の一体化を目指した学習活動の工夫

- (1) 学習のめあての提示
付きたい力に基づいて，ねらいを明確に，具体的に提示する。
- (2) 評価問題の実施
単位時間内に評価問題を実施し，一人一人の学習内容の理解の程度を見取り，適切な支援をしていく。児童は学習を振り返り，次時への意欲につなげる。
- (3) 授業構成の工夫
時間内に評価問題が実施できるように授業構成を工夫し，ねらいに沿った発問や板書を考える。
- (4) ノート指導
算数科を中心に学年に応じてノート指導に取り組む。「めあて」「自分の考え・友達の考え」「まとめ」「練習問題」等の項目立てをする。

第1学年 国語科学習指導案

指導者 後藤 幸子

○ 単元名 くらべてよう。～じどう車くらべ～

○ 本時の学習 3/8時間
(1) ねらい トラックの仕事とつくりについて読み取り，自動車図鑑のカード1枚ができる。

(2) 学習の展開

学 習 活 動	教 師 の 支 援
1. 本時のめあてをつかむ。	トラックのカードをかんせいさせよう。 ～トラックのしごととはなにかな？つくりはどうなっているかな～
2. 教材文を音読する。	・前時のバスや乗用車の仕事とつくりについてまとめたカードを確認，仕事とつくりについて確認する。 ・音読ではトラックの仕事とつくりについて確かめながら音読することを知らせる。
3. トラックの仕事とつくりについて確かめ，カードに書く。	・「しごとをしています。」「あります。」「ついでいます。」「などの表現から仕事とつくりについて書いている部分をとらえることができることに気付かせる。 ・仕事とつくりについて書いている部分に線を引かせ，グループで確かめるようにする。 ・仕事とつくりを色別のカードに書くことで仕事に当たる文とつくりで当たる文を認識させるようにする。
4. トラックのカードを完成させる。	・仕事とつくりをつなぐ「そのために」の働きをとらえさせながら，視写させる。 ・視写ができた子どもにはカードの上の部分にトラックの絵をかくようにさせる。 ・完成したカードの文章を音読し，確かめる。
5. 学習を振り返り，評価問題に取り組む。	・書いてある項目から，トラックの仕事とつくりを丸を付けるというプリントを用いて本時の評価を行う。
6. 次時の学習の展開をもつ。	・クレーン車についてカードにまとめることを告げ，家庭での音読の時にはその仕事とつくりを気付けて読むように伝える。

くらべてよう。シート
（トラック）

トラックは，どんなしごとを していますか。あかで
まるを つけましょう。
また，どんなつくりになっ ていますか。あおで まるを
つけましょう。

・人をのせて はこぶ しごと
・おもいものを つりあげる しごと
・にもつを はこぶ しごと
・びようきのひとを びよういんに はこぶ しごと
・しつかりした あしが ついてい
ひろい にだいに なつてい
・どせきのところが ひろく つくつてい
・タイヤが たくさんついてい
・大きなまどが たくさん ある
・じようぶなうでが，のびたりうごいたりするようにつくつて
いる。

1年国語 「評価問題」



5年授業風景 友達の考え方を説明する

「ねらい」「評価問題」を指導案に位置付ける

2 成 果

- ・めあてを黒板に掲示したり、ノートに書いたりすることによって、指導者も児童も本時に何を学ぶのかの見通しをもって学習に臨むことができたようになった。また、「めあて」「自分の考え・友達の考え」「まとめ」等のカードを黒板に掲示することによって、児童が学習の流れをはっきりととらえ、今何をするのかを意識することができ、学習への集中力の高まりを感じるようになった。
- ・時間内に評価問題を実施できる授業を成立させるために、自己解決と学び合いの場面をどのように展開していくか、適切な発問はどのようなものかを教師側が強く意識するようになった。児童も自分の考えをもとうとする意欲が強くなり、できるまでやるという姿勢で取り組んでいる。
- ・授業の終末に評価問題を取り入れて学習を振り返ることによって、「分かったこと、できるようになったこと」を明確にし、児童一人一人の理解の程度を把握することができるようになった。そして学習して分かった喜びを次の学習意欲につなげていけるようにした。また、ねらいを実現できなかった児童への事後指導に生かすこともできた。授業中には気付かなかったつまづきやすいところなどを確認することもできた。
- ・ねらいの意識付け、意欲の持続が図られた。ノート指導は、低学年ほど時間と根気を必要とするが、指導の成果が表れてきた。

IV 研究の具体

1 基礎学力の定着を図るための分かる授業づくり

(1) 具体的な取り組み

① 学習のめあての提示

どんなことを学習するのか、何が分かればいいのかを、具体的で明確なめあてで提示していくようにした。「めあて」カードなどを準備し視覚的にもとらえやすくする工夫をした。

② 評価問題の実施と授業構成の工夫

指導計画に評価の場面・方法を位置付け、評価問題を実施した。また、単位時間内に評価問題を実施できるように、発問や授業構成を工夫した。これは算数科だけでなく国語科でも実施するようになった。

③ 継続的なノート指導

算数科を中心にノートのとり方を指導した。学年に応じて「めあて」「自分の考え」「友達の考え」「まとめ」「練習問題」などの項目立てをし、ていねいに見やすく書くように指導した。

(2) 成果と課題

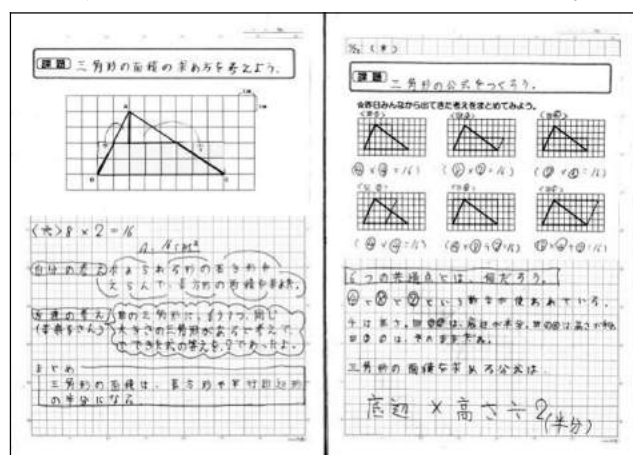
- 指導者側も児童もその時間に何を学ぶのか、意識化するとともに見通しをもって活動することができた。「めあて」「自分の考え・友達の考え」「まとめ」「練習問題」などのカードの掲示や板書を工夫することによって、学習の流れが分かりやすくなり、集中して学ぶ姿が見られるようになった。また、国語、算数に限らずどの教科でもねらいを掲示するようになったという教師の声も聞かれた。
- 授業時間内に評価問題を実施することで、机間指導で見落している部分に気付いたり、児童一人一人の理解の程度を把握したり、その後の指導に生かすこともできた。児童自身も学習内容の確認ができるよさがあり、分かったという満足感や次時への期待をもつことができていた。
- 秋田県学習状況調査の結果、漢字の読み書き問題の平均通過率は、各学年とも設定通過率を13～20%上回った。また、4・5年生の算数でも平均通過率が設定通過率を10～15%上回っていたことから、基礎・基本が身に付いてきたことが分かる。
- 付けた力とねらいにずれがないか、提示しためあてが適切なものかどうか、また、ねらいとまとめにずれがないかどうかをいつも意識しなければいけない。また、めあてが学習活動の提示だけにしないようにしていきたい。
- 国語科でも、本時のねらいを実現できたかという視点で評価問題を位置付けた。しかし、算数に比べ客観的に評価できる問題をつくるのが難しいと感じている。どのようなものが評価問題として適切なのかを追究していきたい。

2 児童の実態に応じたきめ細かな指導のための環境づくり

(1) 具体的な取り組み

① チャレンジタイムの活用

毎日15分間のドリル学習を継続した。学級担任と学級担任以外がペアで指導に当たり、できるだけその場で評価できるように内容を工夫して基礎・基本の定着を目指した。基本的に学級担任の計画で行うが、次の内容は全校で取り組んだ。



5年 算数ノート

- ・ミニ作文(条件つき作文) 毎週月曜日
- ・チャレンジ算数テスト 第2火曜日
- ・チャレンジ漢字テスト 第4火曜日

② 基本的学習習慣の定着

「学習のようすをふりかえろう」カードを使って、児童が自己評価をした。長期休業前や学期の終わりを評価の機会とし、家庭からも感想や励ましの一文を書いてもらうなど学習習慣の定着を共に進めた。同時に教師側も学級状況の評価をしていった。

③ 家庭学習の習慣化

学年に応じて学習の仕方の具体例を示し、宿題や自主学習（ひとりべんきょう）に継続して取り組めるように、授業参観日等の機会に保護者に働きかけ、協力をいただいた。また、長期休業中は、各学年ごとに1週間程度の学習会を開き、基本的な内容を定着させる機会とした。

④ 小・中学校の連携

互いに授業を見合う機会を作り情報交換をした。小・中学校9年間を見通した家庭学習のしお리를作成し、各家庭に配布した。保護者には望ましい生活習慣の形成（早寝・早起き・朝ごはん）と合わせて家庭学習に関心をもってもらい学校と共に子どもを育てていこうという意識で取り組んでもらった。

(2) 成果と課題

- チャレンジテストに向けた家庭学習に計画的に取り組む児童が見られるようになり、学校と家庭の勉強につながりをもたせることができた。チャレンジテストは、成果が試されるので、こつこつと努力している児童の励みにもなっている。また、学年に応じたチャレンジ作文は、問題文を注意深く読んで理解する力や文章表現力の育成に効果があり、秋田県の学習状況調査では条件を意識して書くことができた。喜んで書く姿がみられるようになり、書くことに対する抵抗が少なくなったと考えている。
- 授業がない長期休業中は、基礎・基本にじっくり時間をかけるよい機会となった。学習会は自由参加であるが、多数の児童が参加し、分りたいという意欲が高いことを感じた。
- 地域の小・中学校4校で、共通の観点で家庭学習のしお리를作成し配布することができた。これによって、小学校でも中学校でも家庭と学校が、同じ指標のもとに一貫した指導をすることができた。
- 学習習慣は一度身に付いたことでもマンネリ化することがあるので、声かけを繰り返すが必要である。取り組む項目を焦点化したり期間を区切ったりするなどの工夫と継続が鍵となっている。
- 教科指導を通した小・中学校連携の実践が今後求められている。

V 課題とその改善

付けたい力とねらい、ねらいと評価という、スタートとゴールを強く意識して授業を組み立てることによって、分かったという満足感をもたせることができた。考えをもって集中して学習に向かおうとする児童は増えているので、発表したり、友達の考えを聞いたり、自分の考えと比較したりしながら、自分の考えを広げ、深め、まとめたりする学び合う力を伸ばしていきたい。学び合う力を伸ばし、個の学びに生かしていくためには、教師の指導力の向上（発問の検討、子どもの発言の取り上げ方、板書構成等）が必要である。

VI 研究実践を振り返って

「ねらいと評価の一体化」という、当たり前のことを取り組みの柱として全教職員で実践し、ある程度の成果を上げることができた。授業改善や教育課程の見直しなど、課題はたくさんあるが、教職員ががんばれば、それに負けまいと応えてくれる児童の姿を励みに、今後も研修を深めていきたい。

チャレンジ作文

ブルで すいすいの 勉強をしたときのことを書きましょう。じぶんが どんなことをしたか、思い出して書きましょう。山本先生がお話したことを 入れて書きましょう。

① ② ③

きこえるあひはひこはをかきましよう。

かきまさい。

中学年用

低学年用

家庭学習のしおり

よりよい家庭学習をめざして

大田東小学校

皆様ご存知のように、本校が2年連続全国学力学習調査でトップクラスになった要因の一つに、家庭学習の習慣化が挙げられています。本校でも、授業で学んだ基礎基本の学習や家庭学習の定着を促すため、各学年に応じた家庭学習会を進めてきました。そこで、今後とも子ども達の学力定着とさらなる向上に向けて、家庭と学校がともに手を携えて取り組んで参りたいと考えています。このパンフレットを参考にしていただき、子ども達が中学校までを見通した家庭学習ができますようご家庭のご協力をお願いいたします。

子どもの可能性が伸びるように
こんなねたろきかけを！

(保護者の方へ)

- 小学低学年
 - ・学習を始める前にテレビを消しましょう
 - ・学習する場所の整理整頓をしましょう
 - ・家庭学習をする時間を決め、親子で参りなど、近くにおいてあげましょう
- 小学中・高学年
 - ・自分で内容を決めて取り組めるよう動機や意欲を高め、その日のがんばりを褒めたりし、継続する意欲につなげましょう
- 中学低学年
 - ・学習の場所を決め、整理整頓をしながら取り組ましましょう
 - ・学習の目標をしっかりと定め、計画を立てて進めることができるようにしましょう
 - ・できるようなったこと、分かったことが増えたことに自信をもたせましょう
- 中学校
 - ・将来の進路のことも考えて自主的に家庭学習ができるよう進めたいと思います
 - ・時間の使い方を考えて計画的に取り組むようアドバイスをしてあげましょう

ここに書かれているのは、あくまでも「めやす」です。一人一人の取り組みの実態に合わせて、自分なりの『家庭学習プラン』を親子で話し合ってみましょう

(子ども達へ)

学年	学年でめざす家庭学習ツコッププラン	めやすの時間
低	やる気を大切に ☆ 毎日、家に帰ったら、きまった時間に勉強しよう ☆ 学校で学習したことをもう一度復習しよう ☆ 自分でやってみたいと思ったことや進めしうなと思ったこと、調べてみたいと思ったことを一人勉強でやるのもいいね ○ 宿題 ○ 漢字 ○ 計算ドリル ○ 日記 ○ 音読 ○ プリントなど	20分
中	自立の力を大切に ☆ 何をするかをきめて、ていねいに取り組もう ☆ ドリル学習やプリント学習では、自分で進めよう ☆ できたことをききあうとていよう ☆ 勉強したことをしっかりと覚えるために、ノートの使い方をききあう進めしうの仕方を見よう ○ 宿題 ○ 学習ノート ○ 漢字 ○ 日記・語 ○ プリントなど	30分
高	子どもの自主性を大切に ☆ 学習の目標をきめて、計画的に一人勉強に取り組もう ☆ 授業の内容やテスト結果を振り返り、苦手なところを克服できるように勉強しよう ☆ 国語や算数を中心に勉強し、他の教科の勉強にも挑戦していこう ○ 宿題 ○ 予習・復習 ○ 学習ノート ○ プリント、問題集など	50分
中・高	☆ 中学校では、小学校の取り組みを基礎として、家庭学習が参りあるものになるように、勉強の仕方についてくわしくアドバイスしています	70分

理解を深め活用する能力を高める授業を目指して

大仙市立太田南小学校 校長 藤本 竜伸

Ⅰ 学校の概要 (平成20年5月1日現在)

	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特別支援学級	計	教員数 1 1
学級数	1	1	1	1	1	1	1	7	
児童数	2 2	2 3	1 9	2 6	2 4	2 6	1	1 4 1	
学校のホームページアドレス				http://www.edu.city.daisen.jp/~ot-minamisyo/					

Ⅱ 取り組んだ課題

- (1) 活用する力を伸ばす指導～自己表現力を高める工夫～
- (2) 理解や習熟に応じたきめ細かな指導
- (3) 家庭及び中学校と連携して力を伸ばす指導

Ⅲ 研究のポイント

1 提案

◎活用する力を伸ばす指導 ～自己表現力を高める工夫～

- (1) 自分の考えを、理由を付けて書くことができるようにするための工夫

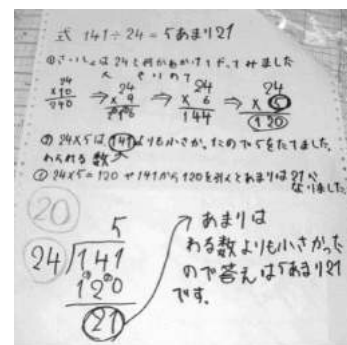
- ① 伝える相手、目的を明確にし書く動機をもたせる。
 - ・「幼稚園の友だちに学校のこと教えるよ」(1年)
 - ・「自分の考えをほかの友だちに発信しよう
～平和の砦を築く～」(6年)
- ② 書き方を知る、書く練習をする、書く機会を多くする。
 - ・クイズ作文、ニュース作文など、形式を提示する。
 - ・算数では文章以外の図表も利用する。
 - ・字数を決めた短作文などを書く機会を多くする。
- ③ 自分の考えをまとめるための活動や時間を保障する。
 - ・必要な資料を集める、選択する。



ニュース作文で(1年生)

- (2) 自分の考えを、分かりやすく相手に伝えるための工夫

- ① 少人数グループでの学び合いで深め、伝える。
 - ・分かったことを自分の言葉でまとめ、自分の表現方法で伝える。(文章で、図表で、イラストで)
 - ・考えの根拠となる資料を明確にして発表する。
 - ・感想を出し合うなど互いのよさを認め合う機会を多くする。
 - ・友達の考えを推測したり、付け足したりする。
- ② 学級全体で学び合いを深め、伝える。
 - ・グループでの話し合いの結果を分かりやすく伝える。
 - ・声の大きさや、見せる資料などを工夫する。



分かったことを自分の言葉で(4年生)

2 成 果

- (1) 自分の考えを、理由を付けて書くことができるようになるための工夫において
 - ・伝える相手、目的を明確にしたことにより、文章を詳しく書けるようになってきた。
 - ・作文の形式を提示することにより、書く活動にスムーズに取り組むことができるようになってきた。
 - ・絵や図、文字に表すことによって、頭の中の自分の考えが整理でき、相手に伝えようとする力も付いてきた。
- (2) 自分の考えを、分かりやすく相手に伝えるための工夫
 - ・小グループや学級全体など、その場に合った声の大きさで話し合ったり、落ち着いた態度で発表できるようになってきた。
 - ・感想を出し合うなど互いのよさを認め合う機会を多くしたために、自信をもって発表する場面が多くなった。



IV 研究の具体

1 具体的な研究内容

(1) 活用する力を伸ばす指導～自己表現力を高める工夫～

① 自分の考えを、理由を付けて考えることができるようになる工夫

書く動機をもたせるために、伝える相手や伝える目的を明らかにすることを心がけた。その上で、単に書かせるのではなく、書き方を学んでから書く練習や機会を多く確保するようにした。

② 自分の考えを、分かりやすく相手に伝えるための工夫

自分が考えたことをグループ内や学級で表現し合って感想や意見を出し合うことで、より相手に分かりやすい表現への改善を図った。

(2) 理解や程度に応じたきめ細かな指導

① 発展的な課題の準備

「プラス・ワン」を合い言葉にして、学習内容を発展させる課題なども一つの工夫や手立てを準備した。例えば、理科では支援員を要請し一緒に授業の準備をするなど実験の準備を幅広く充実するようにした。

② きめ細かな指導体制の確立

理解に時間がかかる子どもについては、複数の教師によるきめ細かな指導（TTや少人数指導）を行い、一人の教師では見逃しがちな、子どものつまづきを早い時期に見付けられるようにした。

③ 一部専科制の導入

算数、音楽、理科等では教師の専門性を生かし、一部専科制を取り入れ、基礎から発展まで充実した学習ができるようにした。

(3) 家庭及び中学校と連携して力を伸ばす指導

学年に応じた目安となる学習時間などの約束事や学習内容を示した「家庭学習の手引き」を作成した。作成に当たっては同じ地区内の小学校や中学校とも連携を取り、小学校から中学校にかけてスムーズにより学習習慣が引き継がれるように配慮した。長期休業前に配



配布・活用している「家庭学習の手引き」

付したが、家庭から「何をどれくらいやればよいか、子どもが自分で考えるようになってきた。」という声が寄せられた。

2 成果と検証

(1) 児童の学習意欲の向上

理由を付けて自分の考えを書くことや発表する機会をつくることは、子どもの思考する時間や場面を保障することにつながる。併せて、それは授業時間の配分や、発問の工夫など授業を改善する視点として有効であり、子どもたちの考えを広げたり、深めたりすることができるようになり、それが学習全体への意欲の高まりにつながってきた。

○ 児童アンケートの結果より（10月調査）

- ・勉強は楽しいか・・・54％（前年度より5％向上）
- ・分からないとき質問できるか・・・48％（前年度より2％向上）
- ・話をしっかりと聞けるか・・・63％（前年度より5％向上）

(2) 自分の考えをまとめ、書いて表現する力や発表する力の向上

○ 教職員の評価アンケートより

- ・発表するときの声が少しずつ大きくなっている。発表時の友達同士の励ましの場面が見られるようになってきた。
- ・発表の語尾までしっかり話せるようになってきた。同時に友達の発表をよく聞くようになってきた。
- ・自分の考えや意見を書いてまとめる力が付いてきた。

(3) 教職員の意識の変化

○ 教職員の学校評価より

- ・子どもの意欲が高まり、朝の「自学タイム」のような短い時間でも集中して勉強に取り組むようになってきた。意欲を高める取り組みが実を結んでいるので、継続していきたい。
- ・「活用する」、「プラス・ワン」など今後も具体的な形で授業に取り組んでいきたい。

V 課題とその改善

意欲をもって学習活動に取り組んだり、自分の考えや意見を書いてまとめたりする力は付いてきたと考えられるが、それをみんなの前で発表することにはまだ遠慮が見られる。そのための改善点として以下のことに取り組みたい。

- 学習活動の中で、根拠や理由を明確にした発表の機会を多く設ける。
- 短時間に自分の考えを簡潔に書く、発表する経験を重ねる。
- 考える力を伸ばす発問や、提示の仕方を工夫する。
- 自分の考えの過程が分かるように文章や図、数式等で表現したり、説明したりする機会を多くする。

VI 研究実践を振り返って

今年度、「みんなの心にプラス・ワン」「毎日の授業にプラス・ワン」を合い言葉に日々の授業実践と全員による授業研究を行い、研修会では互いに忌憚のない意見交換を行ってきた。また大学教授に来ていただくなど学外の指導者の意見を広く聞くようにした。その結果、指導者が互いのよい点を学び合いながら授業力の向上と、授業改善につなげることができた。そのことにより子どもの学習に対する意欲、学力の向上が見られたと考える。

しかしこの取り組みは、今後も継続することによりその成果が期待される。子どもの読解力、活用する力を高めるためにも、学校全体でさらに「プラス・ワン」を進めていきたい。

読解力を身につけた国見っ子の育成 ～国語科の授業づくり「書く」活動を通して～

大仙市立太田北小学校 校長 菊地 清志

I 学校の概要 (平成20年5月1日現在)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計	教員数
学級数	1	1	1	1	1	1	1	7	10
児童数	9	11	9	7	14	8	1	59	
学校のホームページアドレス									http://www.edu.city.daisen.akita.jp/~ot-kitasyo/

II 取り組んだ課題

- (1) 基礎学力の確実な定着を図る分かる授業の実現
- (2) 活用する力を伸ばす授業の創造

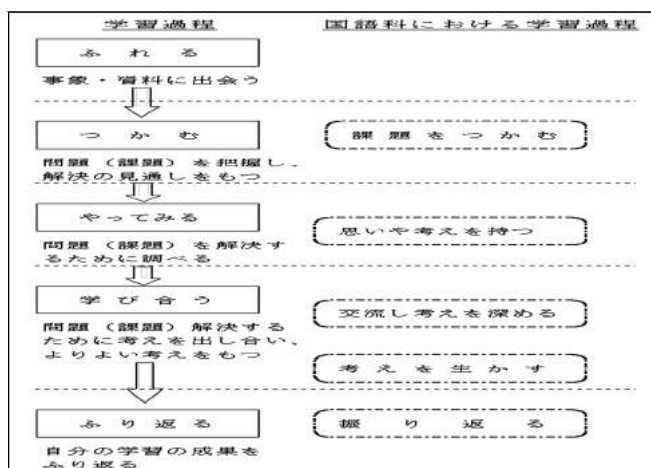
III 研究のポイント

1 提 案

◎学習過程における、「書く」活動の位置付けを明確にした授業づくりの実践

○言葉や表現に着目しながら、文章の内容を理解するための「読みの学習」の工夫

- ① サイドラインを引いたり、書き込みをしたりしながら読み取りをしていく。叙述に即した読み取りができるよう言葉への気付きを大切に学習を進める。そして、場面の様子や登場人物の人柄、気持ちが表れている部分にサイドラインを引く活動を取り入れている。単元によっては、似ている場面の比較を、叙述の種類ごとにサイドラインの色を分けて、叙述の違いに着目して学習を進める。また、サイドラインの横に想像した情景や、その叙述から気付いたことなども書き込むようにする。



- ② 表現の違いや文末表現の違いなどに着目する

物語文では、例えば「言う」に係のある表現として、「つぶやく」「聞き返す」などの言葉が状況に応じて使い分けられている場合がある。それらの意味の違いを考えて語彙を広げるとともに、人物の心情を読み取る手がかりとする。

説明文では、文末の表現などの違いに着目させ、様子を表す文と事実や分かったことを表す文を見付ける。段落相互の関係を読み取る際には、最初の接続語などの言葉に着目していく。

- ③ 読み取りの学習では、理由を書く学習を大切にする

叙述をもとに考えることができるよう、人物の行動や性格などを読み取る際には、なぜそのように考えたのか理由を書くようにする。また、友達の発表を聞くときにも、その考えだけでなく、理由の相違に注意して聞くようにする。

本校における学習過程

一の場面	四の場面
山登りする前、お父さんは、ちいちゃん、お兄ちゃん、お母さんをつれて、お祖のはかまいりに行きました。その帰り道、お祖を見上げたお父さんが、「つぶやきました。」 「かげおくりのよくてきょうな空だなあ。」 「えっ、かげおくり。」 と、おちちゃんもききました。	明るい光が顔に当たって、目がさめました。 「まぶしいな。」 ちいちゃんは、暑いような寒いような気がしました。 ひどくどろどろがやけています。いつの間にか、太陽は、高く上がっていました。 そのとき、

3年「ちいちゃんのかげおくり」から
二つの場面を上下に並べ、行間を少し広めにとったシート
★二つのかげおくりをくらべて、四の場面のかげおくりの様子やちいちゃんの気持ちを考えよう。

3 成果と検証

読解力を身に付けた子どもを育成するために、目指す子どもの姿を設定し、その姿をどれだけ実現しているかで読解力が高められたのかを検証することになっている。

(目指す子どもの姿)

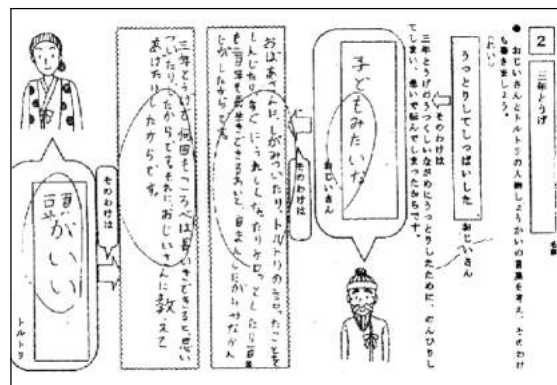
- 関心をもち、言葉や表現に着目しながら文章の内容を理解することができる子ども
- 読み取ったことや考えたことを、目的や条件に応じて書き表すことができる子ども

- サイドラインを引いたり、書き込みをしたりすることで、書かれている内容を整理して読み取ることが少しずつできるようになってきている。言葉や文の表現の違いや文末表現の違いに着目し、言葉への気付きを大切にして学習を進めてきたことが成果につながっていると考える。

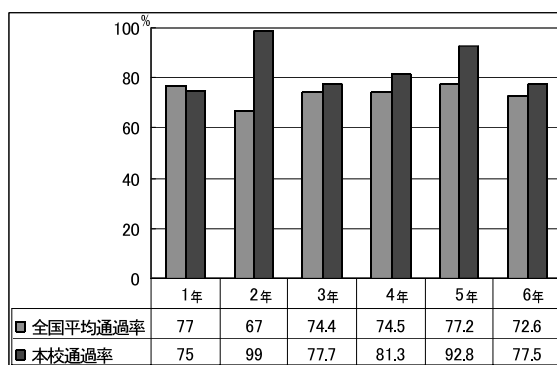
また、ノートやワークシートなどの見取りでは、読み取ったことや自分の考えたことなどを目的や条件に応じて書き表すことができるようになってきている。更に、CRT学力検査の結果では、「書くこと」の通過率に伸びが見られた。これらのことは自分の考えを書くために、多様な様式を用い、継続してきた成果ではないかととらえている。

- 系統表を作成することで、共通理解する物差しとなり、各学年の目指す姿を明確にすることができた。さらには、評価規準としても活用することができた。1時間単位の授業を通して、「本当にねらいたいことは何か」「身に付けさせたい力は何かな」を確認するようになった。同時に、学習後の子どもの姿を具体化することにもつながった。
- 振り返りをノートやカードへ「書く」活動を積み重ねたことで、学習のねらいに沿った評価ができるようになってきた。自己評価の紹介や相互評価によって、互いのよさに気付いたりすることができるようになった。学習を振り返ることは、自分の学習の成果を確認する場である。また継続することによって自己評価力を高め、学習意欲にもつながっていくと考えている。
- 国語以外においても、算数では自分の考えを図や数直線、言葉で書き表すことができるようになってきている。理科では、実験の結果、自分の考え、分かったことなどをイラストや吹き出し、言葉でまとめるようになってきている。国語科での「書く」活動を取り入れた授業改善が他教科等へ広がり、基礎的・基本的な学力が着実に定着してきている。
- 教職員アンケートでも子どもたちの変容をとらえたり、取り組みを評価したりした記載が多かった。

- ・ 書く教材を学習したときに、以前より目的に応じて詳しく書くことができるようになった。
- ・ 言葉に着目して読むようになり、気持ちや考えが芽生えてきたように思う。分からない言葉は、すぐ辞書を使って調べている子どももいる。
- ・ 「書くこと」「読むこと」の系統表があったおかげで、学年としてどこまでねらいたいのかははっきり分かり、それを意識して指導することができた。



3年「三年とうげ」 考えた理由を書くシート



CRT学力検査 「書くこと」平均通過率との比較

V 課題とその改善

- (1) いろいろな情報を理解・利用・熟考するためにも「読む力」をもっと育てていく必要がある。そのためには、文章を比較して読むことや建設的に批判して読むような活動を設けるとともに、効果的な資料の準備や作成に力を入れていきたい。また、読み取ったことや考えたことをお互いに交流・評価する場を設定していきたい。
- (2) 「考える力」をより一層育てていく必要がある。そのためには、書くことを大切にした学習を継続し、考えをより広げ、深められるように言葉で伝え合う場、表現し合う場の設定及び充実を図っていきたい。

VI 研究実践を振り返って

教職員全体が研究に対して共通理解を図りながら取り組んだことで、基礎的な学力の定着と読解力の向上につながったと思う。また、「書く」活動は、自分の思考、感覚を一度見つめ直す段階を経るので、読解力の育成には有効であると考えている。

これからも子どもたちが言葉に関心をもちながら、いろいろな活動で一生懸命読んだり、書いたり、考えたり、主体的に活動することができるような授業改善に努めていきたい。

研究主題

生徒個々の学ぶ意欲を高め，自ら学び自ら考える力を育てる指導の工夫

大仙市立太田中学校 校長 今井 聡

I 学校の概要（平成20年5月1日現在）

	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特別支援学級	計	教員数
学級数	2	2	2				2	8	1 7
生徒数	5 0	5 8	7 2				2	1 8 2	
学校のホームページアドレス					http://www.edu.city.daisen.akita.jp/~ot-otatyu/index.html				

本校は大仙市の東部に位置し，奥羽山脈のふもとに広がる田園地帯に囲まれた地域に位置している。県花壇コンクールでは2年連続県知事賞を受賞するなど，「花と緑」に囲まれた素晴らしい自然環境の中で，「夢や希望をもって可能性に挑戦し続ける生徒の育成」を学校教育目標に掲げ，日々教育活動に取り組んでいる。アニメ「となりのトトロ」の背景画を描いた男鹿和雄さんは本校の出身者である。

II 取り組んだ課題

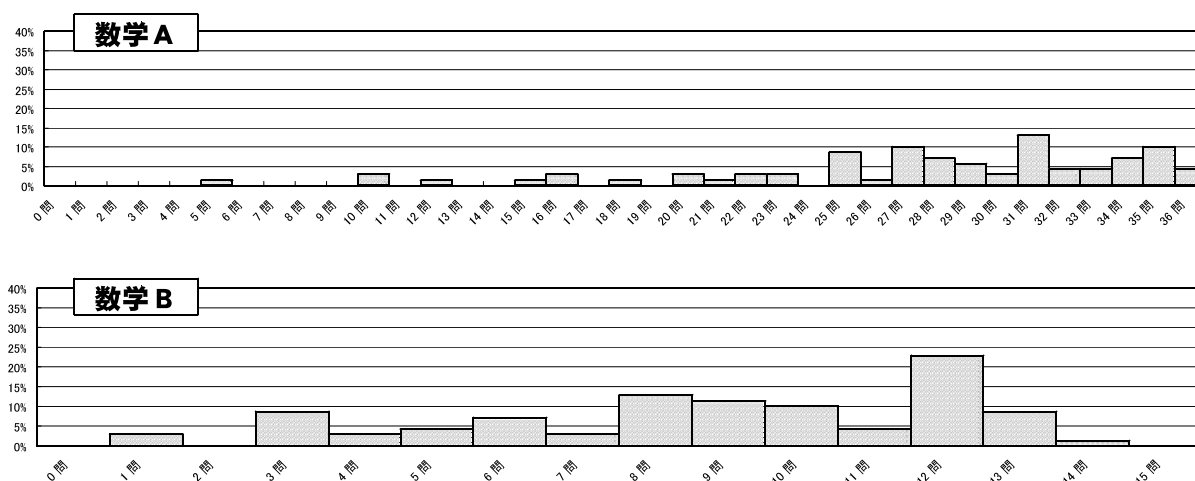
- (1) 基礎学力の確実な定着を図る分かる授業の実現
- (2) 活用する力を伸ばす授業の創造

III 研究のポイント

1 提 案

4月に実施した全国学力・学習状況調査の結果を本校独自に採点・分析したところ，学んだことを実生活や実社会に生かそうとする意識や学んだ知識・技能を活用して考える問題の正答率が低いことが分かった。

平成20年度 全国学力・学習状況調査 数学A・Bの結果



そこで，今年度は「知識・技能を活用する学習活動を取り入れた授業の工夫と改善」という授業改善のテーマを設定し，P-D-C-A-C-Aの授業改善サイクルで研修を進めてきた。7月までの取り組みを夏季休業中に振り返り，その結果から新たな取り組みを定め，すべての教科等での共通実践と各教科ごとの具体的なポイントに基づいた実践を積み重ねることができた。年度途中にチェックを入れたことで，それまでの取り組みの甘さを反省することができ，8月からの実践を充実したものとするすることができた。

2 成 果

- (1) 「習得」「活用」「探究」の学習活動を組み入れて、実生活や実社会とのかかわりを大切にした授業を進めてきた。このことにより、生徒の実態把握、教材の工夫と活用、単元構成の工夫などの実践がこれまで以上に行われた。その結果、生徒の基礎学力や学習意欲が高まり、主体的に学習に取り組む姿が見られるようになってきた。改めて、上記の実践の大切さを認識することができた。
- (2) 各教科の特色を生かしながら、知識・技能を活用する学習活動を取り入れた授業を展開してきた。このことにより、生徒が課題解決に向けて、習得した知識・技能を活用しながら、一人で試行錯誤する姿やグループなどでかかわりながら意欲的に取り組む姿が多く見られるようになった。



グループで学び合う

IV 研究の具体

1 具体的な研究内容

- (1) 3つの「わ（笑い、ワクワク、分かったという声）」のある授業の工夫

授業においては、特に導入に力を入れた。生徒たちに「なぜ？」「どうして？」といったワクワクするような問いをもたせる教材や教具の工夫を行い、生徒の知的好奇心を揺さぶるような学習活動を行った。また、少人数指導やT Tによる指導を積極的に取り入れた。3年生5教科の授業においては通常の2クラスを3クラスに編成して行ったり、全学年の英語や体育の授業にT Tによる指導を取り入れたりするなど、個に応じたきめ細かな指導が充実するよう学習形態を工夫した。授業展開においては、学習したことが身に付いているかを確認するために、生徒同士の説明活動や学び合う活動を取り入れて理解の確認を図ったり、授業で分かったこと、分からなかったことを記述する活動を自己評価として行ったりした。

- (2) 習得した知識・技能を活用し、表現する学習活動の工夫

知識・技能の定着と思考力・判断力・表現力等の育成を車の両輪として相互に関連させながら進めていくために、知識・技能の習得とこれらを活用する学習活動のバランスを重視した授業改善を目指していくことを全教職員で確認し合った。そして、次の三つを各教科共通の実践事項として授業改善に取り組んだ。

- | |
|-------------------------------------|
| ①実生活や実社会とのつながりを大切にした課題や教材の開発に努める |
| ②課題解決の方法や理由、解決の過程を説明できるよう言語活動の充実を図る |
| ③互いの考えを伝え合い、自分や集団の考えを発展させる場を設定する |

- (3) 取り組みのチェックと軌道修正

授業改善への取り組みを評価して軌道修正を図るために、年に2回（長期休業中）の授業改善チェックのための校内研修会を実施し、授業改善に取り組んできた。すなわちP-D-C-A-C-Aのサイクルで授業改善を進めてきた。

7月に昨年度の県学習状況調査と学習に関するアンケート調査を実施したところ、記述問題でのつまづきが目立った。一つの答えを見付けただすことは得意でも、自分の知識を再構築して考え、自分の言葉でまとめて表現する力が未だ不足していることが分かった。夏季休業中の研修会では「受け身」「問いがもてない」「じっくり考える場が不足している」「自分の言葉で他とかかわれない」といった声が出された。授業の振り返りからは、ドリル学習や教師の説明中心の授業が依然として多いことも分かった。そこで、8月からは「解釈」「説明」「論述」といった活動を積極的に取り入れるとともに、新たに四つの共通実践事項を設定し取り組んだ。

- | | |
|-----------------|----------------------|
| ①「考える課題」を設定する | ②小グループによる話し合いの機会を増やす |
| ③自分の考えを話す機会を増やす | ④学習を自分の言葉で振り返る |

この共通実践事項に基づいて、各教科ではさらに具体的なポイントを明らかにして授業実践に取り組んだ。

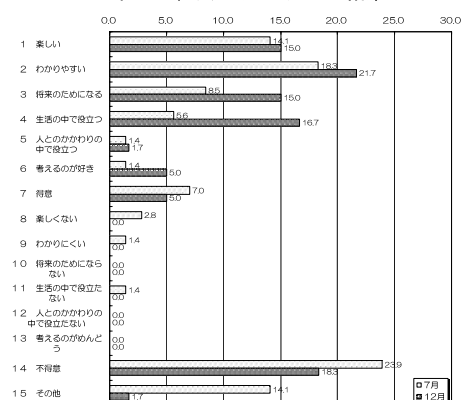
2 成果と検証

(1) 県学習状況調査及び学習意欲に関するアンケート調査（7月と12月の比較）の分析から

12月実施の県学習状況調査の結果は設定通過率を上回る設問が増えてきており、各学年とも基礎的・基本的な内容の定着が図られてきている。少人数指導やTTによる指導を積極的に取り入れ、個に応じたきめ細かな指導を積み重ねたことによるものと考ええる。

また、学習意欲に関するアンケート調査では、「学校の勉強がよくわかる」と答えている生徒の割合が増えている。また、教科の好きな理由を「楽しい」「わかりやすい」と答える傾向が強く、特に5教科で情意面の向上がみられた。「3つのわ（笑い、ワクワク、分かった）」のある授業の積み重ねと互いに学び合う主体的な学習を進めることができた成果によるものと考ええる。

3年生 社会のアンケート結果

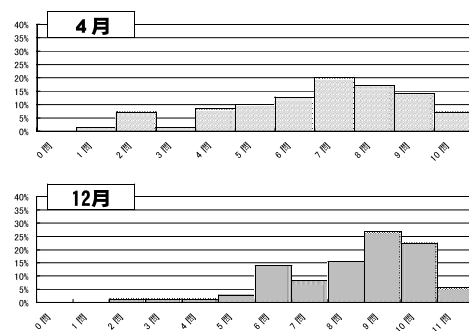


(2) 各教科ごとの具体的なポイントに基づいた授業分析と標準学力検査の分析結果から

授業においては、個人でじっくり課題追究したり、書くことによって思考したりする活動やグループ内・グループ間で学び合う活動がこれまで以上に充実してきた。生徒たちは「習得したものを活用することで課題を解決することができる」という実感をもつようになってきた。

また、12月に3年生が実施した全国学力模範テスト結果からは、4月に比べて「主として活用する問題」の正答率も向上してきたことが分かった。「解釈」「説明」「論述」といった学習活動を積極的に取り入れた授業の積み重ねによるものと考ええる。

国語B 分布比較



V 課題とその改善

- (1) 県の学習状況調査結果（7月と12月との比較）では、「不得意」という理由で嫌いと答えている生徒が多い教科もあり、教科による差も見られる。校内研修会を通して、各教科の視点からより細かな分析と改善に向けた取り組みについて話し合いをしていきたい。併せて、教科の枠を超えた模擬授業研修やミニ校内授業研究会を実施し、学校全体で共通理解を図りながら授業づくりもさらに進めていきたい。
- (2) 自分の考えを表現したり、発表したりする力がまだ不足している。授業を構成する際に、意図的かつ継続的に自分の考えをまとめ発表させる場を設け、表現する力を付けていく必要がある。そのため、習得した知識・技能を活用して考え、想像したり表現したりする言語活動を重視した学習活動をすべての教科で実践していきたい。
- (3) 各教科の学習で習得した知識・技能を、総合的な学習の時間における探究の学習（活動）にどのようにつなげ、生かしていくかについては、今後も研究・実践を続けていく必要がある。

VI 研究実践を振り返って

今年度、本校では全国学力・学習状況調査の結果を分析し、課題を把握して全教科で授業改善に取り組んできた。年間の改善サイクルをP-D-C-A-C-Aとし、2回のチェックを入れたことにより、生徒の実態を踏まえながらどのようにして授業改善を進めていくかを話し合うことができ、全教職員が同じベクトルで学校全体の授業改善に取り組むことができた。この実践は生徒の豊かな表情や心の成長にもつながり、「学校が好き」と思える生徒も大幅に増えた。今年度の取り組みを新たなスタートとし、「習得・活用・探究」のバランスのとれた授業実践をさらに目指していきたい。

「学力向上実践研究推進事業」

美郷町教育委員会

美郷町立千屋小学校

美郷町立千畑南小学校

美郷町立千畑中学校

学びの力を身につけ、豊かに生きる千畑の子に

美郷町教育委員会 教育長 後松順之助

I 推進地区の概要

推進校数	小学校	2校	中学校	1校	合計	3校
推進校名	千屋小学校, 千畑南小学校 千畑中学校					

1 研究のねらい

- ・当町は合併前の旧町村ごとに3つの地区（六郷・仙南・千畑）から形成されているが、本推進地区の研究推進を核として町内各校の連帯感を一層深めたい。
- ・児童生徒が学習に自信をもつことで町が目指す「人づくり」につなげたい。
- ・研究推進を通して教職員の職能意識の維持向上につとめ、教職員にとって働きがいのある町を目指したい。

2 研究の概要

(1) 小・中学校の連携

当町では、数年前から授業を核とした小・中学校の交流がなされており、今回の実践研究においても自然な形で小・中学校が連携した研究がなされている。

今回の実践研究では、各推進校共通の取り組みとして次の3つを決定した。

- ・国語力の育成
- ・理数教育の改善・充実
- ・総合的な学習の時間における環境教育（主として水環境）

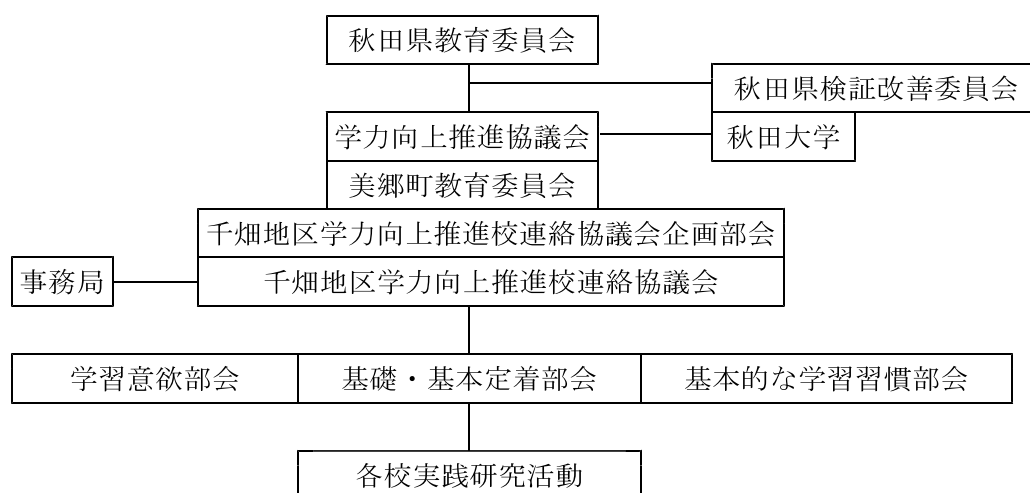
国語力と理数教育については、全国学力・学習状況調査結果の分析から、B問題で見られた活用に関する学力の改善が課題ととらえている。

総合的な学習の時間については、当町が誇る、恵まれた「水環境」を計画的・継続的に学習していこうとするものである。

(2) 保護者・地域に開かれた研究

実践研究推進に係る情報を町内各校はもとより保護者・町民に提供し、積極的に授業参観や意見を聞く場を設けることによって研究成果の把握や検証をより確かなものとする。

(3) 研究組織



Ⅱ 特徴的な取り組みの状況

1 美郷町千畑地区小・中学校連携研修（平成20年8月6日）

(1) 研修の目的

- ① 【小学校（卒業）→（入学）中学校】ギャップのない一貫した指導をする。
- ② 同地区の教職員が共通意識をもって共に研究を進めていく気運を高める。

(2) 概要

- ① 中1ギャップ解消のための具体策
- ② 実践研究推進事業にかかわる講話（秋田県教育庁南教育事務所）
- ③ 実践研究推進事業情報交換

2 自主公開研究会（平成20年11月20日）

(1) 公開校 千屋小学校

(2) ねらい

参観者に見てほしい点をあらかじめ提示し、授業参観後の研究会の話し合いの中心にとらせ、研究推進の検証をする。

(3) 授業参観の観点

- ① 求める児童の姿
- ② 研究の柱
- ③ 具体的実践事項（児童の「わくわく感」を大切にした授業・すべての児童に自分の考えをもたせ、発信できる授業・望ましい学習習慣を身に付けるためのベースをつくる。）

Ⅲ 今後の取り組み

1 2年次自主公開研究会の開催（千畑南小学校を予定）

2 全町小・中学校連携研修会の開催

3 保護者地域への情報発信・提供

学ぶ喜びを知り，進んで探究する若松の子に

美郷町立千屋小学校 校長 和泉 真一郎

I 学校の概要 (平成20年5月1日現在)

	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特別支援学級	計	教員数
学級数	1	2	1	2	1	1	1	9	1 5
児童数	3 9	4 6	3 8	4 4	3 4	3 9	2	2 4 2	
	学校のホームページアドレス				http://www.obako.or.jp/matunami/				

II 研究の概要

1 取り組んだ課題

- (1) 学習意欲を高めたり，学習習慣の定着を図ったりするための手立ての工夫
- (2) 考える力を高め，それを表現する能力や言葉で伝え合う能力を育成するための指導方法と教材の工夫

2 目指す子ども像

- (1) 学習規律や学習スキルを身に付け，学ぶ楽しさを実感し，めあてをもって学習に取り組む子ども
- (2) 既習事項を活用して新たな学習内容のねらいを達成し，多様な場面に生かすことができる子ども
- (3) 自分の考えをもって主体的に学びに参加し，よさや違いに気付きながらよりよいものを求めていこうとする子ども

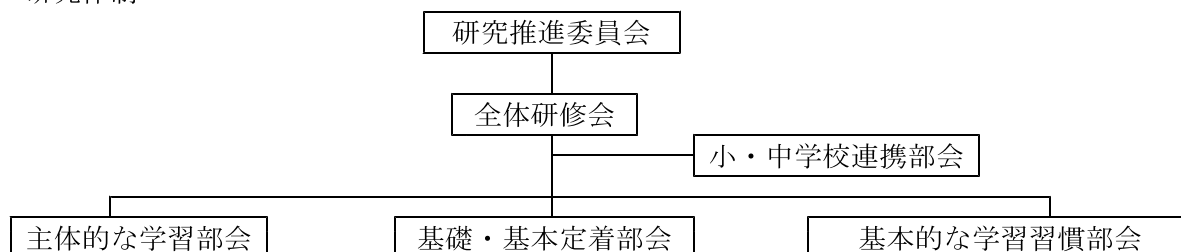
〈3か年研究の1年次として〉

- ・自分の考えをもち，それを何らかのかたち(話す，書く，図にするなど)で表現する。
- ・友達とのかかわりの中で，自分の考えを発信できる。

3 研究の柱

- (1) 学習意欲を喚起するための手立て，アプローチの工夫をする。
- (2) 1単位時間の学習過程の中に，自分の考えをもつ時間を設定する。
- (3) 1単位時間の学習時間の中に，友達とかかわり合う時間を設定する。

4 研究体制



5 研究の進め方

「主体的な学習部会」「基礎・基本定着部会」「基本的な学習習慣部会」のいずれかに全教職員が所属し，1年次の目標と具体的実践項目を立て，それを共通理解しながら授業改善を進めた。また，学習意欲の向上や学習習慣(学習規律や学習スキルを含む)の徹底にも当たった。

Ⅲ 研究の具体

1 授業改善への取り組み

(1) 授業改善の視点の設定

	主体的な学習部会	基礎・基本定着部会	基本的な学習習慣部会
目標	児童の「わくわく感」を大切に した授業の構築をする。	すべての児童に自分の考 えをもたせ、発信できる ようにする。	望ましい学習習慣を身に 付けるためのベースをつ くる。
具体的 実践 項目	① 問題(課題)を、より身近なも のにする工夫 ア 問題(課題)の工夫 イ 身近な地域素材や体験活動、 操作場面の重視 ウ パソコンや情報機器の利用 エ 問題(課題)をみんなのもの にするための時間の設定 ② 自分の考えをもつ時間、友達 とかかわり合う時間の設定 ア 書くことの重視 イ 分かってもらおうという姿 勢、聞く姿勢の徹底	① 指導過程の工夫 ア ねらいに迫るため の自力解決と学び合 いの場の設定 イ 学習活動の時間配 分の工夫 ② 学びの足跡が残るノ ート指導 ア 書き方の共通実践 イ 多様な問題解決方 法の蓄積と活用 ウ 1単位時間内の達 成度の把握と補充	① 授業時における「身 に付けたい基本的な学 習習慣」の一覧表の作 成と徹底 ② 「声のものさし」の 掲示 ③ 「聞き方・話し方・ 書き方の約束」の掲示 ④ 「家庭学習の手引き (子ども向け・保護者向 け)」の作成と、望まし い家庭学習の在り方に ついての啓発

授業そのものには「主体的な学習部会」と「基礎・基本定着部会」から提案されたことを盛り込んで改善を進めた。

(2) 自主公開研究会の実施

「研究の方向性や内容について広く問い、意見や指導をいただき、今後の研究に生かす」という趣旨で実施した。国語・算数・研究推進の3つの分科会では、参会の先生方や指導主事の先生方から様々なアドバイスをいただいた。

【公開授業】

国語 2年「読んですまいる！ すまいる絵本を作ろう」

5年「目的に応じた伝え方を考えよう」

算数 4年「わり算の筆算を考えようⅡ」

6年「およその面積を求めよう」

(3) 大学教授を招いての校内研修

10月と1月に授業改善のポイントや活用型の授業、次年度の研究プランについて指導していただいた。

(4) 教職員アンケートの実施

7月と10月に「実施してみて効果的だったこと」「これからの研究のために(提案、疑問、悩みなど)」ということについて中間評価を実施した。学級の実態に合わせた担任の細やかな工夫とその効果を共有することによって、よいことが全体に広がるという効果があった。

2 学習習慣のベースを確立するための取り組み

(1) 「学習研究部便り」の発行

指定研究の紹介や学校での取り組み、学習用具や家庭学習についてのお願いなどについて家庭向けの通信を発行した。



5年 国語の授業



6年 算数の授業

(2) 「家庭学習の手引き(子ども向け・保護者向け)」の発行

参観日の折に全学級で手引きにかかわる授業を行い、全教職員が共通理解を図り、保護者と連携して取り組むようにした。

【保護者から】

- ・とても参考になった。集中して目安の時間まで取り組めるようにがんばらせたいと思う。
- ・子どもと一緒に聞くことができたのでよかった。共通の約束事なので、これを参考にして親子でがんばっていききたい。

【児童の評価カードから(12月)】

- ・集中して学習するようになった。
- ・自分から取り組むようになった。
- ・見直しや答え合わせ、間違い直しをするようになった。

(3) 「聞き方・話し方・書き方の約束(低・中・高)」と「声のもののさし」の掲示

児童も教職員も常に意識することができるように、教室の前面に掲示した。

3 成果とその要因(教職員アンケートより)

成 果	要 因
・学ぼう、理解しようとする意識が向上してきた。 ・発言しようとする意欲が向上してきた。 ・表現(特に記述)の技能が向上してきた。 ・自分の考えをもつことができるようになってきた。 ・友達との話し合いに向かう姿勢が主体的になった。 ・友達の発言をじっくり聞くようになってきた。 ・家庭でも自主的に学習する児童が増えた。 ・学習規律や学習ルールが浸透してきた。	・「目指す児童像」「研究の柱」「授業改善の視点」を常に意識しての実践 ・授業研究会などの校内研究の充実 ・課題の明確化を含む教材研究の深化 ・PDCAサイクルの意識化 ・家庭学習についての意識の統一 ・規律やルールの意識化と指導の徹底

IV 今後の取り組み

1 平成20年度の成果と課題

- 実態把握の上に立った課題(問題)の工夫により、子どもの取り組みが意欲的になった。
- 「つかむ・考える・かかわる・振り返る」という授業の流れが定着してきた。
- 自分の考えをもって友達とかかわり、伝えよう分かってもらおうとする気持ちが高まった。
- 既習事項を生かして新しい課題を解決していくという「活用する学習」の授業づくりが必要である。
- 友達とかかわり合いながら学びを進めていくことを大事にした指導過程を工夫していく。

2 平成21年度の取り組み予定

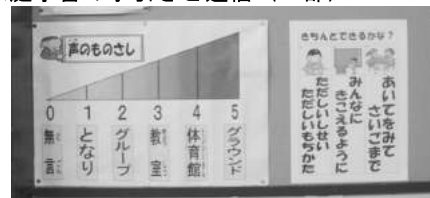
- ・主体的に学習に臨む姿勢や意欲をかき立てる手立ての工夫
- ・「活用する学習」「探究する学習」の授業の構築
- ・友達とかかわり合うことを重視した指導過程の工夫
- ・基本的な生活習慣や家庭学習、学習規律や学習スキルを含む学習習慣の充実

V 研究実践を振り返って

地域指定ということもあり、当初は悩みも多かった。しかし、話し合いを重ね、研究の方向や視点が定まると職員の力が結集し、初年度なりの成果は得られたのではないかと思います。次年度は研究の趣旨にのっとり、プランを整備・充実させて取り組み、成果を上げていきたい。



家庭学習の手引きと通信(一部)



声のもののさし

研究主題

たがいに高め合う子どもの育成 ～かかわりながらつくる確かな学び～

美郷町立千畑南小学校 校長 高山 泰文

I 学校の概要 (平成20年5月1日現在)

	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特別支援学級	計	教員数
学級数	1	1	1	1	1	1	0	6	1 1
児童数	2 7	2 1	2 4	1 7	3 4	3 0	0	1 5 3	
	学校のホームページアドレス				http://www.obako.or.jp/wanpaku/				

II 研究の概要

1 取り組んだ課題

- (1) 子どもたちの学ぶ意欲や表現力を高め、確かな学力が定着するための指導方法を追究する。
- (2) 子ども同士がかかわり合いながら、確かな学びが成立する授業の在り方を追究する。

2 研究の仮説

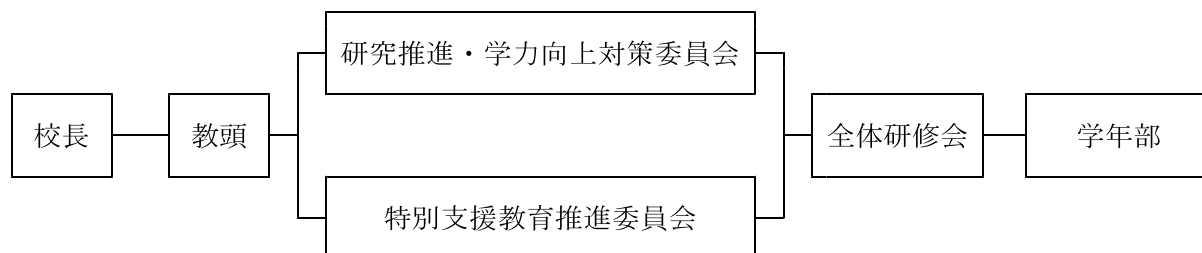
子ども同士のかかわりの場면을効果的に設定した学習過程を工夫するならば、たがいに交流し合うよさや学ぶ楽しさを実感し、一人一人が確かな学びを習得できるであろう。

3 取り組み方法

- (1) 授業における子ども同士の効果的なかかわり合いを通じて、確かな学力が定着するための指導方法について研修を深める。
- (2) 授業力の向上を目指すため、校内授業研究会の在り方を工夫する。
- (3) 授業以外の時間でも確かな学力を定着させるための方策を探る。
- (4) 大学教授による指導を受ける機会を設け、授業改善に役立てる。

4 研究体制

- ・研究推進・学力向上委員会 校内研究の検討、計画の立案
授業研究会や研修会の企画・運営、研修だよりの発行
(研究主任)
- ・特別支援教育推進委員会 校内の特別支援教育推進体制の整備
特別支援が必要な児童の個別の指導計画の作成
- ・全体研修会 研究推進についての共通理解、指導案検討会、授業研究会
各種研修会、伝達講習会
- ・学年部 T Tによる指導形態での授業改善の手立ての提示
各教科等の年間計画の見直し



Ⅲ 研究の具体

1 目指す子ども像

- ・ 学ぶ楽しさを実感し、意欲的に学習に取り組む子ども
- ・ 友達と学び合いながら、共に成長しようとする子ども
- ・ 困難な課題にも挑戦し、解決しようとする子ども

2 具体的な取り組み

(1) 学習意欲を高める学び合いの場の設定

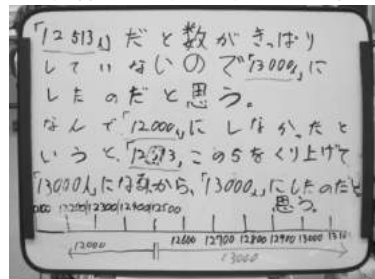
- ① 学年の実態に応じたかかわり合いの場の工夫（資料1）
- ② 学び合いを促進するための教材教具の工夫（資料2）

(2) 基礎・基本を定着させる工夫

- ① 学習のきまりの確認と徹底（資料3）
- ② 「ぐんぐんタイム」の設定による漢字と計算力の向上
- ③ 読書タイムの設定
- ④ ノートの使い方や家庭学習の指導と確認（資料4）
- ⑤ 学習状況調査の分析結果を受けての対応



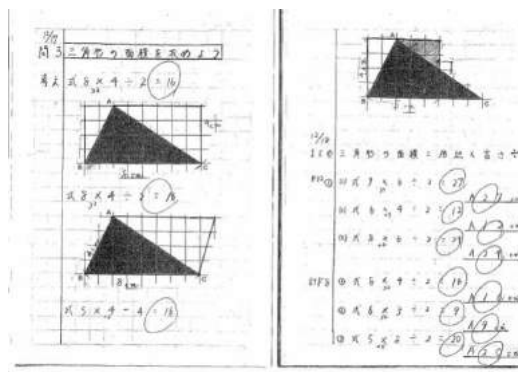
資料1 4年生の学び合いの様子



資料2 学び合い用のホワイトボード



資料3 学習におけるきまりや心がけを示したカード



資料4 5年生の算数ノートの例

(3) 研修体制の整備

- ① 授業研究会による授業力の向上
- ② 授業後の研究協議会の内容の充実（資料5）
- ③ 意識調査による実態把握と指導効果の確認
- ④ 「桜っ子を語る会」での児童理解

3 成果と検証

(1) 子どもたち同士のかかわり合いを重視した「学び合い」や指導過程などを工夫した授業により学習意欲の向上と学習内容の理解が促進された。

- ① 学年や子どもの実態に応じた学び合いを工夫した結果、多様な考えを出したり、活用したりする力が少しずつ伸びてきた。子どもたちの学習意欲も向上してきた。（資料6，7）
- ② 導入での意欲を喚起する学習課題の提示，終末でのまとめと評価の工夫など，明確な授業構成により，1単位時間の授業における活動内容が明確になり，子どもたちが見通しをもって集中して学習するようになった。
- ③ 学年に応じたノート指導により，学習のステップを子ども自身が意識しながら記入できるようになった。
- ④ 学習習慣が定着し，学校でも家庭でも進んで学習に取り組むようになった。



資料5 研究協議会で用いた概念化シート

わいわいタイムは好きですか。	大好き，好き	26人	ふつう	4人
わいわいタイムで学習内容はよく分かりましたか。	よく分かった，分かった	27人	ふつう	3人
わいわいタイムは，これからも続けたいですか。	ぜひ続けたい，続けたい	28人	どちらでもよい	2人

資料6 6年生へのアンケートから *「わいわいタイム」は6年生での学び合いの名称

- ・理由を説明する力がつくし，他の人の意見や自分と違う意見の人と交流すればいい案が出る。
- ・あやふやだったところが分かるようになる。
- ・コース別学習のときより分かりやすい。
- ・何通りも解く方法が分かる。
- ・みんなの前で発表は無理，という人でも積極的に話してくれる。
- ・いろんな意見を聞き合った方が，自分一人で解くより自信がもてて発表しやすい。
- ・いろんな意見や理由を聞けるから楽しい。
- ・「そうだなあ。」と思うことがあるので，勉強になる。
- ・自分が思いつかなかった意見も出て，勉強になる。
- ・楽しいのでこれからも続けたい。

資料7 6年生へのアンケートから記述の抜粋

(2) 校内授業研究会が活性化され，得られた情報がその後の授業に実践される機会が多くなり，日常の授業改善につながった。

- ① 研究授業後の研究協議会で，概念化シートや授業参観カードを活用しながら話し合いを深め，参加者全員の建設的な意見が多く出されるようになり，その後の授業実践に生かしやすくなった。
- ② 通常の研究協議会より話しやすい雰囲気になったため，参加者の自主的な発言が出やすくなり，短時間で職員同士の意見交流を活発に行うことができた。

IV 今後の取り組み

1 平成20年度の成果と課題

- (1) かかわり合いながら学習する「学び合い」を工夫することにより，子どもたちの学ぶ意欲が高まった。これは学習者の基盤形成に欠かせないものであり，「学び合い」が確かな学びを実現する可能性をもっていることを授業を通して全職員が認識することができた。
- (2) 確かな学びとは，子どもたちのどのような学習の姿をいうのかはっきりさせる必要がある。
- (3) より有効な「学び合い」の具体的な指導方法を確立する必要がある。

2 平成21年度の取り組み予定

- (1) 確かな学びにつながる「学び合い」を生かした授業構成の在り方。
- (2) 習得した学習内容を様々な場面で活用できるようにする指導方法。

V 研究実践を振り返って

かかわり合いながら学習する「学び合い」の実践は不十分な面もあったが，指導方法の一つとして大変有効なことが分かった。子どもたちが学習意欲を向上させ，学ぶことを有用で意義あることと認識し，正しい学習習慣を形成できるようにすることが学力向上の基盤になると考える。その上で，各種の取り組みが有効に機能するように職員全員で研修を深めていきたい。

研究主題

生きる力を支える基礎・基本を養い，学び合いが深まる指導
－生徒がのりだし，みつけ，ねり合う授業の工夫－

美郷町立千畑中学校 校長 松田 篤

I 学校の概要（平成20年5月1日現在）

	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特別支援学級	計	教員数
学級数	2	2	3					7	1 5
生徒数	6 5	7 6	9 3					2 3 4	
	学校のホームページアドレス				http://www.obako.or.jp/mahirune/				

II 研究の概要

1 取り組んだ課題

- (1) 基礎的・基本的な知識・技能の習得
- (2) 思考力・判断力・表現力等の育成
- (3) 学習習慣の定着
- (4) 学習意欲の向上

2 研究内容

(1) 授業改善への取り組み

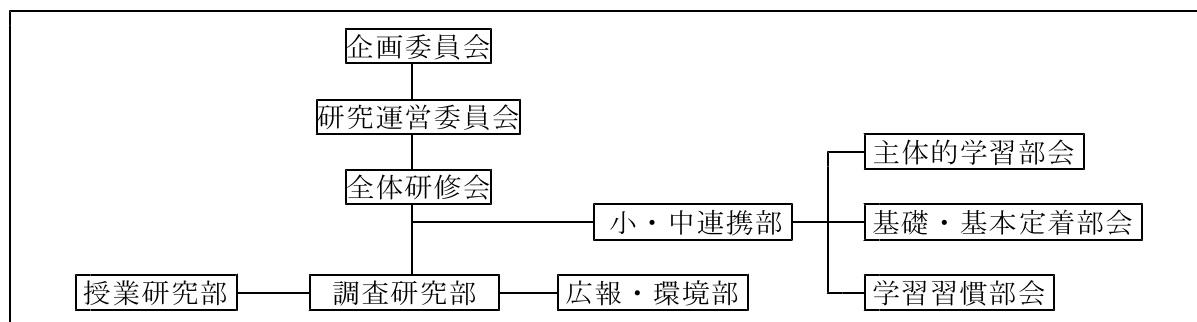
- ① 学びの過程を生かした学習指導の工夫
- ② 授業力向上を目的としたスキルアップウィークの実施
- ③ 生徒の学習に関する実態把握や教師の授業改善のための授業評価，アンケートの実施と活用
- ④ 授業力を高める校内研修の充実

(2) 学習環境の整備や支援の工夫

- ① 学習通信の発行による家庭への啓発
- ② 生徒の学習に対する意識を高めるための学習コーナーや掲示の充実
- ③ 生徒の基礎・基本の定着と家庭学習の習慣化のための自学時間の設定

3 研究体制

全職員で学力向上に取り組み，成果，課題を検証するために，次のような組織をつくり研究を進めた。



Ⅲ 研究の具体

1 授業改善への取り組み

- (1) 本校の学びの過程に沿った授業実践
本校では学びの過程を右のように3段階にとらえて授業改善を進めた。

推進事業1年目の今年度は特に生徒の学習意欲を高めるための「のりだし」に重点を置いて取り組んだ。手立てとしては次の2点に留意した。

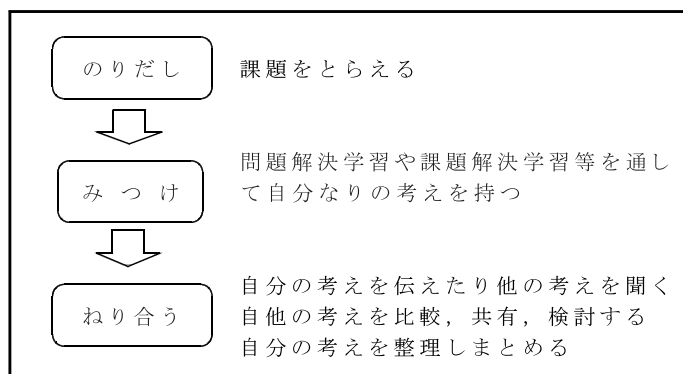
- 意欲をかき立てる課題の設定
「分かりやすい」「分かりそうだ」「興味がもてる」「必然性がある」「生徒との距離が近い、身近に感じられる」等

- 写真や映像、実物の提示等による導入

「のりだし」の工夫の実際（研究授業での実践より）	
国語（3年）	新聞という実生活に関連したものを使っての課題設定
社会（2年）	政策に対するキャッチコピーを作るという課題設定
数学（3年）	前時の確認をフラッシュカードで行い、意欲を引き出す導入
英語（1年）	生徒が準備した写真を使うことで関心を高める課題設定
英語（1年）	A L Tを効果的に活用し生徒の興味を引き付ける導入
理科（1年）	レンズを自由にのぞかせながら課題につなげていく導入
特活（3年）	毎日行っている朝食チェックから浮かび上がった問題点による課題の設定



写真を使って問答（英語）



本校の学びの過程

- (2) 授業力向上を目的としたスキルアップウィークの実施
教科の枠を超えて教師が互いに授業を見合い、評価する期間を年間2回、6月と11月に2週間ずつ設定した。評価については授業参観カードに記入して授業者にわたし、授業改善に生かすこととした。

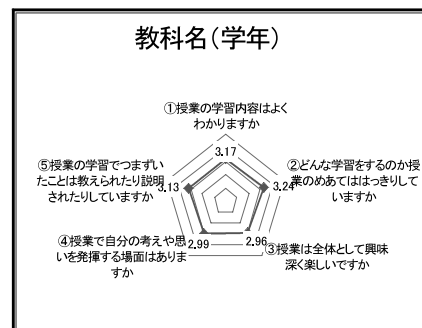
- 授業参観（評価カード）の視点
- 〈指導の状況〉
- 生徒の課題意識を高める工夫（のりだし）
 - 生徒が主体的に課題解決に取り組む工夫（みつけ）
 - 共に学びあい、ねり合う場の設定（ねり合い）
 - 個に配慮した指導（一人ひとりの見届け）
- 〈授業スキル〉
- 教師の立ち位置、視線は適切か
 - 発問のとき何を尋ねているか分かりやすいか
 - 指示をするとき何をどうすればよいかわかりやすいか
 - 授業中のルールが生徒に徹底されているか

- (3) 授業評価、アンケートの実施による課題の明確化と改善

生徒による授業評価については、昨年度は1月に行ったが、早めに授業改善に生かすことができるよう7月に実施した。結果はグラフ化して教科担任に渡された。また、生徒の学習や授業への取り組み方についての実態を把握し、課題を明確にして改善につなげるために保護者、生徒、教師によるアンケート調査を実施し、改善に取り組んだ。

- (4) 校内研修の充実

大学教授を招いて、授業における「話し合い活動」に関する研修と「学ぶ意欲をもった子ども像」というテーマでの研修を行った。ワークショップ形式の研修の進め方や授業改善の手立てについて研修を深めることができた。



生徒による授業評価結果

2 学習環境の整備や支援への取り組み

- (1) 学習通信の発行による家庭への啓発

家庭と学校が連携して学力向上に取り組めるように、学校での取り組みの紹介や、家庭へのお願いなどの内容を記載した学習通信を発行している。

(2) 学習コーナーや掲示の充実

学習室に学習プリントコーナーを設置し、生徒が自由にプリント学習が進められるようにしている。特に受検を控えた3年生が時間の合間に取り組むなど、利用が多い。また学習コーナーを廊下に設置し、各教科で要点やポイントを貼り出したり、授業で作成したレポートを掲示したりするなどしている。保健委員会では学力向上と密接にかかわる生活習慣の改善を呼びかけるポスターを掲示している。



学習通信

(3) 自学の時間の設定

各教科における基礎・基本の確実な定着のためにはドリルや反復など家庭学習に負うところが大きい。本校の課題として家庭学習にこつこつ取り組めない生徒が少なくないという実態から、10分間の自学時間を設定した。この時間で家庭学習の取りかかりの部分を行うこととして、各自で教科と内容を決めて取り組んでいる。なお、点検は学級担任が行っている。

12月に生徒に自由記述の形でアンケートを行ったところ、約9割の生徒がこの時間を肯定的にとらえていた。具体的な記述例は次の通りである。

*家での取りかかりが早くなったことで、前より勉強量が増えた。(1年女子)

*家に帰ってから家庭学習がとてもしやすくなりました。最初は10分なんてやって意味があるのかと思いましたがこんなにできるとはびっくりです。(2年女子)

*その日の授業内容を短時間で振り返って勉強することができるため、苦手なところの克服に役立った。(3年男子)

IV 今後の取り組み

1 平成20年度の成果と課題

(1) 成果

- 授業における導入や課題設定の工夫など教師の授業改善に対する意識の高まりにより、生徒の学習に対する意欲が高まった。
- 学習に関する家庭への啓発や学習環境の工夫、充実により、生徒の学習に対する意識の高まりが見られた。

(2) 課題

- 言語活動の充実を基にした活用力を身に付けさせるための授業をいかに構築していくかについてさらに検討していく必要がある。
- 学び合いやねり合いが成立するように生徒への手立てや支援について研究する。
- 生徒の変容や取り組みの成果を把握し、課題の改善につながるような検証方法を研究する。

2 平成21年度の取り組み予定

- (1) 「のりだし、みつけ、ねり合う」のプロセスについて、言語活動の充実と活用力の向上という視点から検討した結果、「のりだし、よむ、考える、伝える、まとめる」に修正したところである。今後、新たな学びの過程で授業を実践し、検証、改善に取り組む。
- (2) 生徒の言語活動にかかわる「話すスキル」「聞くスキル」「書くスキル」の向上や生徒が考えたり伝えたりする場面における手立てや支援の工夫に取り組む。
- (3) どの時期に何を使ってどんな内容で成果を把握するのか、評価結果をどう改善につなげていくかなどを具体的にしたPDCA計画を作成する。

V 研究実践を振り返って

何からどのように進めていけばよいのか悩みながらのスタートであったが、他校の取り組みを参考にしつつ、校内で目指す学力について話し合ったり、講師の先生を招いて勉強する機会をもつなどしたりして、これまで以上に研修を深めることができた一年であった。今年度の取り組みを基に来年度はさらに研究を深め、目指す生徒像の実現に向けて職員が一体となって取り組んでいきたい。

「夢創造！！チャレンジ推進事業 学力向上推
進カウンセラーの活用」

大館市立川口小学校

男鹿市立鵜木小学校

能代市立能代第一中学校

仙北市立神代中学校

横手市立山内中学校

研究主題

確かな読み取りができ、自分の考えを表現する子どもの育成 ～国語科の「読むこと」の指導の工夫を通して～

大館市立川口小学校 校長 石岡 文芳

I 学校の概要 (平成20年5月1日現在)

	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特別支援学級	計	教員数
学級数	1	1	1	1	1	1	2	8	1 2
児童数	2 8	1 8	2 2	2 4	2 0	2 6	3	1 4 1	
	学校のホームページアドレス				http://www.kawa1021@eos.ocn.ne.jp				

II 活用のねらい

- (1) 「確かな読み取りができ、自分の考えを表現する子どもを育てる」ための効果的な指導の在り方について、大学教員の指導を得て、授業実践を重ねることで教師の授業力を高める。

III 特徴的な取り組み

1 提 案

【読み取りの指導の工夫】

◎言葉や叙述に即して読み取る指導の工夫

- ・児童が感じ取ったことはどの叙述をもとにしているのか、この叙述から何が分かるかを考えさせる。教材から離れて感覚だけで理解したつもりにならない。
叙述をもとに心情や状況をとらえさせる。
- ・言葉や文の理解のために、辞書を使ったり、文脈から考えさせたりする。低学年であれば動作化も効果的に取り入れる。
- ・ねらいにせまるために児童に考えを出させ、話し合いで深めさせる。また、文字面の意味を読むことのみならず、書かれている叙述から書かれていない意図や心情（行間）を読むための手立てを工夫する。



クレール車の「うで」の動作化（1年）

2 成 果

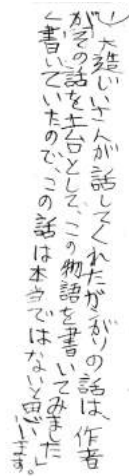
- ・「どの叙述から分かるか」という根拠を繰り返し問うことによって、児童が言葉や叙述に着目するようになってきた。
- ・傍線を引きながら読む習慣を付けることで正確に読み落としなく文を読むことができるようになってきた。
- ・児童に考えを出させ、話し合いで深めさせるには、適切な課題設定と発問が大事になってくる。児童の読みの違いをそのまま流すことなく、なぜそう思うのか問い返して深める必要がある。児童の考えに「なぜ」またその答えに「なぜ」と問いかけていく方法が効果があることが分かった。



傍線を引いた様子（4年）



叙述をもとにしたまとめ（3年）



叙述をもとにしたまとめ（5年）

IV 実施の概要

1 具体的な研究内容と取り組み

(1) 読み取りの指導の工夫

- ① 言葉や叙述に即して読み取る指導の工夫をする。
 - ・書き表されている言葉や叙述から分かることや感じ取れることは何か、あるいは、分かったことや感じたことは、どの言葉や叙述を根拠にしたのかを児童に問いかける。
 - ・文の前後の関係、言葉や叙述の比較、動作化、辞書の活用などから表現されていることの意味をつかませる。
 - ・言葉や叙述に着目して傍線を引いたり、書き込みをしたりして気持ちの変化をとらえるようにする。
- ② 学習の見通しをもたせる単元計画を工夫する。
 - ・主体的に読み深めることができるように、児童の考えを取り入れながら単元計画を組み立てる。
 - ・学習に見通しがもてるように、単元計画を掲示する。
- ③ 文章と自分の経験を結び付けて、思いや考えを表現するための場を設ける。
 - ・読み取ったことを動作や音読に表したり、他の場面に応用したりする。
 - ・読み取ったことに、自分の思いや考えを入れて発表したり、文にまとめたりする。



単元計画の掲示（3年）

(2) 読書活動や言葉を広げる活動の工夫

- ① 読書活動のめあてをもたせたり、読書の年間計画を立てたりして意欲をもたせる。
- ② 言葉のはげみ学習、詩や名文の暗唱、音読練習、国語コーナー掲示など環境を整える。

(3) 指導者の力量向上の取り組み

- ① 模擬授業をし、よりよい指導方法を探る。
- ② 授業の事前・事後の研究会の充実を図る。



ワークショップ型研究会

2 成果

- (1) 「どの叙述から分かるか」という根拠を繰り返し問うことによって、児童が言葉や叙述に着目するようになってきた。
- (2) 「幅広く読書をしよう」などの学年相応のめあてをもたせ、年間計画には、読書運動やテーマ読書を組み入れた。担任の呼びかけもあって、いろいろな本を読もうとする意欲が出てきた。また、週1回言葉の学習ドリルで学習したり、月々の詩や名文を決めて暗唱して発表したりすることによって、言葉に関心をもつようになってきた。
- (3) 研究授業に向け2回の事前研究会の後、本時の模擬授業をやり、発問や板書などを確認することで、ねらいにせまる指導方法を探ることができた。

また、事後研究会を「ワークショップ型」で行うことによって、活発な話し合いができ充実した研究会となった。

V 成果の普及に関する取り組み

- (1) 実践の「成果と課題」を明らかにし、来年度の研究につなげていく。
- (2) 成果を自校のホームページに載せ、広く情報発信した。

VI 研究実践を振り返って

教師の指導力の向上が児童の学力アップに確実に繋がると考えている。教師の意識が変わり、授業が改善されていくことが研修のねらいである。今年度、「学力向上推進カウンセラーの活用」の事業で、秋田大学の成田雅樹先生に教材研究の大切さを教えていただいた。そして、ワークショップ型研究会で一人一人の意識の向上が見られたと思う。この力を今後も児童への指導に生かしていきたい。

研究主題

読解力を高める ～必要な情報を整理し、伝え合う活動を通して～

男鹿市立鶴木小学校 校長 大山 順子

I 学校の概要 (平成20年5月1日現在)

	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特別支援学級	計	教員数
学級数	1	1	1	1	1	1	0	6	1 1
児童数	1 2	8	1 1	1 5	1 1	1 0	0	6 7	
学校のホームページアドレス					http://www11.ocn.ne.jp/~unokies/				

II 活用のねらい

- (1) 大学教員を学力向上推進カウンセラーとして派遣し、研修会や授業研究会を実施し、経営上の課題分析・解決等を目指す。
- (2) 授業研究会における大学教員の助言をもとに、学習過程の設定等の仕方を工夫し、本校の課題である子どもの実験器具の操作技能や実験結果をもとに考察する力を高めていく。

III 特徴的な取り組み

1 提 案

- ・大学の教員から理科の実験、観察に係る教材選択の在り方や実験方法、指導方法などの具体策を、専門的な見地から助言をいただくことで、子ども一人一人の実験や観察の技能を高めたり、科学的思考力を深めたりすることにつながった。
- ・また、理科を中心とした校内研修を進める過程において、全教職員で本時の課題設定や活動内容の設定をはじめ、教材選択や指導方法等、学習過程の構築を吟味し合うことにより、全校体制による研究推進の充実に結び付いた。
- ・理科以外の教科についても、基礎・基本の確実な定着を図るための学習過程の工夫、指導方法の工夫などに生かすことができた。

2 成 果

- ・第1回授業研究会では、当日までの気候条件が思わしくなかったにもかかわらず、ほとんどの児童が選択した植物を用いて、光合成のヨウ素デンプン反応を的確にとらえることができた。そして、自分たちで立てた仮説に基づき、子ども一人一人が自分の考えを明確にもちながら話し合いに参加し、植物の光合成について考察を深めていきながら、“どんな植物でも日光が当たると葉ででんぷんができる”というねらいを押さえることができた。
- ・第2回授業研究会では、「どんな物が電気を通すのだろうか」という学習課題を設定し、子ども一人一人が自分で選んだ物で実験できるように、ハサミや缶、プラスチック、木、紙など、家から持ってきた物や教室にある物など多様な材料を準備した。子ども一人一人が自分で材料を選びながら積極的に実験に取り組むとともに、テスターを正しく使いながら、電気を通す、通さないの結果を得ることができた。

IV 実施の概要

1 第1回授業研究会

(1) 事前の指導助言

単子葉、樹木以外の植物の種類が「光合成による結果」がとらえやすいということ、実験の際に葉の大きさや葉の脱色方法によっても、でんぷんの出方が左右されるなどということを手伝っていただいた。

(2) 学習材の準備や実験方法の工夫

本時では葉の種類や厚み、葉の大きさに配慮して、10種類（大豆、さつまいも、ミニトマト、マリーゴールド、ドウダンツツジ、シロツメクサ、オオバコ、サクラ、キウイ、ヒメジョオン）の植物を選択した。

(3) 授業を実施して

当日までの気候条件が思わしくなかったにもかかわらず、ほとんどの児童が選択した植物を用いて、光合成のヨウ素でんぷん反応を的確にとらえることができた。その結果、“どんな植物でも日光が当たると葉ででんぷんができる”というねらいを押さえることができた。

2 第2回授業研究会

(1) 学習材の準備

「どんな物が電気を通すのだろうか」という学習課題を設定し、ハサミや缶、プラスチック、木、紙など、家から持ってきた物や教室にある物など多様な材料を準備した。

(2) 授業を実施して

子ども一人一人が自分で材料を選びながら積極的に実験に取り組むとともに、テスターを正しく使いながら、電気を通す通さないの結果を得ることができた。



テスターを使って実験する様子

(3) 授業後の指導助言

電気を通す物と通さない物を多様に準備したが、初歩の段階では、教師側で、この1時間で押さえない物の一つずつ提示して、考えさせてからみんなで確認することが大切である。本時では、材質を類型化しておきながら、“金属は電気を通す”ことを押さえたかった。

V 成果の普及に関する取り組み

(1) 1月9日に開催された「第2回授業力向上推進協議会」で実践発表を行い、本校における取り組みの成果について、参加した先生方に普及することができた。

(2) 本校のホームページに、本事業に対する取り組みの様子を掲載し、その成果を公開していくことにしている。

VI 研究実践を振り返って

7月の研究授業では、自分たちで立てた予想に基づき、子ども一人一人が自分の考えを明確にしながら話し合いに参加し、植物の光合成について考察を深めていくことにつながった。

授業研究会で確認できたことを基に、他教科においても、学習材を適切に設定することが図られている。そのことが、子どもの予想を基に意図的な発問をしたり、学び合いの場を設定したりするなど、学習過程の工夫等に生かされ、授業改善に結び付いている。

大学教員との連携を図る内容として、研究授業と研究協議を設定したが、本校の教職員と一緒に事前検討会の場で指導案を十分に吟味したり、指導過程に関する悩みや課題点を整理しておいたりすることで、より多くの手立ての工夫を得ることができたと考える。

研究主題

基礎学力の向上と学ぶ意欲を高める学習指導の充実 －読解力や活用する力を伸ばす指導方法の工夫－

能代市立能代第一中学校 校長 三田 裕

I 学校の概要 (平成20年5月1日現在)

	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特別支援学級	計	教員数
学級数	3	3	2				0	8	1 8
生徒数	7 4	9 4	6 5				0	2 3 3	
	学校のホームページアドレス				http://www.shirakami.or.jp/~icchu1/				

II 活用のねらい

- (1) 本校では実践課題の一つに、各教科における思考のプロセスが身に付くような授業の工夫を掲げている。そこで社会科において、表やグラフ・地図・写真等から、課題を発見し解決していく授業を構成し、指導助言を得ることにした。
- (2) 本事業を機会に、継続して大学との連携や相談・交流等を推進する。



III 特徴的な取り組み

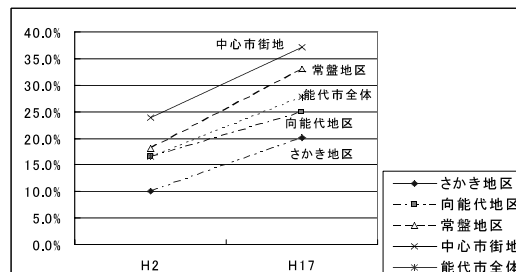
1 提案

表やグラフ・地図・写真から、課題を発見し解決していく授業 社会科地理的分野 2年「人口から見た日本の地域的特色」

課題発見の資料から分かること・疑問に思うことを発表し、学習課題をつくる

地区	H2	H17	増減	増減率
さかき地区	6,477	7,362	885	12.0%
向能代地区	9,736	9,624	-112	-1.1%
常盤地区	2,818	2,190	-628	-22.3%
中心市街地	3,837	2,821	-1,016	-26.5%
能代市全体	55,915	51,703	-4,212	-7.5%

資料① 能代市の主な地区の人口の増減



資料② 能代市の主な地区の
65歳以上の老年人口割合の変化

資料①②から能代市内でも地区によって人口増減率と高齢化率に偏りがあることを読み取る。
「中心市街地の人口減少率や高齢化の割合が一番高い。さかき地区は増えている。
老年人口の割合も低い。向能代は横ばいだ。さかき地区ってどんな地域だろう？」

学習課題 「能代市の人口のかたよりはどのように起きているのだろうか？」

2 成果

- ① 単元の取扱いに関する疑問や活用する力を高めるための指導方法など、実践上の疑問に対して、学会等の最新の情報を基にした指導を得ることができ、「活用する力」を高める社会科の授業はどうあるべきか考えることができた。
- ② 大学教員に直接指導してもらった機会を得たことで、今後も継続して大学との連携や相談・交流等が可能になった。

IV 実施の概要

1 授業の実際

能代市の人口に関する表やグラフ・写真等を読み取って学習課題をつくり、さらにそれを解決するための資料を提示し、思考のプロセスが身に付くような授業を構成した。

本校の研究課題	活用する力を伸ばす授業の創造
項 目	各教科における思考のプロセスが身に付くような授業の工夫

前ページから

↓

課題解決の資料を提示し、学習課題を解決していく 《個→グループ→一斉》

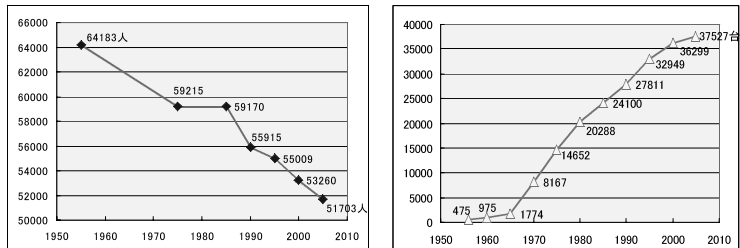
資料① 能代市の交通マップ



資料② JR能代駅1日平均乗車人員(人)

年度	乗車人員(人)
平成8年度	1,564
平成18年度	862

資料③ 能代市の人口とクルマ保有数の変化



資料④ さかき地区ってどこだろう？



資料⑤ 写真 「S38畠町大通」「郊外型大型店」「さかきや落合地区の新しいまち」

地図やグラフ・写真等から、能代市の人口のかたよりは「交通網の整備やクルマ社会の進展、郊外型大型店の進出、新たな住宅地の造成などによる人口移動が原因ではないか」と考え発表する。

2 大学教員のかかわり

事前に電話で日程を調整し、メールで指導案を送付、当日の研究会で指導を受けた。その後もメールで論文や著作物の紹介を受けた。

V 成果の普及に関する取り組み

- (1) 他校の教員に呼びかけ、当日の授業を参観してもらうとともに、郡市社会科冬季研修会で成果の普及に努めた。
- (2) 秋田大学 井門正美研究室のHPで本実践を紹介するということがだったので、掲載後、広く閲覧を呼びかけたい。



VI 研究実践を振り返って

地域素材を教材化し、生徒の興味・関心を引き出して、意欲的に思考する授業を行うことができたと感じている。今後も大学から必要な情報を得て、実践に役立てることができればと思う。

研究主題

自分の可能性を探り、進んで考え学ぶことのできる生徒の育成 ～開かれた学校づくりを通して～

仙北市立神代中学校 校長 柴田 政幸

I 学校の概要 (平成20年5月1日現在)

	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特別支援学級	計	教員数
学級数	1	1	2				1	5	1 1
生徒数	3 6	2 9	4 2				1	1 0 8	
学校のホームページアドレス					http://www.city.semboku.akita.jp/sc_jinchu				

II 活用のねらい

「教科の専門性」ということもあり、特に中学校ではこれまで教科を超えた共同での授業研究が十分には行われてこなかった。そこでカウンセラー事業をよい機会として、教科の垣根をなくし近隣の小・中学校・大学・市教育委員会・教育事務所等と連携を図り共同研究チームをつくり、チームで単元構成、ねらい、教材研究、授業展開、授業形態、発問、支援等に至るまで研究を進める。

III 特徴的な取り組み

1 提 案

授業研究では、共同研究として教科の垣根を超えた共通の視点に基づき、研究会（事前の検討、参観、協議）に当たる。メンバーは、学力向上推進カウンセラー（大学教授）を中核とし、校内全職員、近隣の小・中学校の教員、大学生、大学院生、指導主事までに広げる。学力向上推進カウンセラーの指導を受け、以下のことを研究の柱とする。

- ・学力を、教科の学習内容についての知識・理解だけでなく、総合的な力としてとらえ、点検改善の体制として3つの部門（教科指導、道徳教育、特別活動推進）を設けて、目指す生徒像を共有化して取り組む。
柱となる体験活動→【学級づくり→生徒の心の成長→学び合う雰囲気づくり→学力向上】
- ・教材として、生徒が課題解決のために必要感を感じるものを提示する。
- ・TTと少人数学習を充実させ、個に応じた指導を充実させる。

2 成 果

- (1) 学習においては、授業でも「進んで学ぼう」とする姿勢を見せる生徒が増えてきた。
- (2) 自分の意見をまとめ、交換しようとする生徒が多くなった。また、粘り強く課題に取り組もうとする生徒が多くなった。
- (3) 学力向上推進カウンセラーの指導を受け、柱となる体験活動を設定し、体験活動との関連を図り道徳の授業を行ったことにより、生徒たちの心が耕され、安定した学級がつくられ、温かい人間関係が形成された。このことにより、意欲的に学習に取り組む生徒が増え、生徒たちの学力が一層向上した。全国学力・学習状況調査、県学習状況調査、各種実力テストの結果も年々向上している。

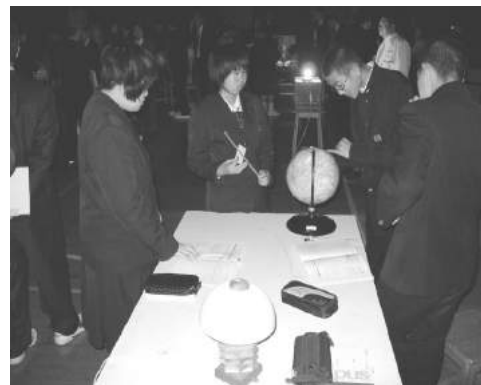
IV 実施の概要

1 理科の授業について

- (1) 授業研究協議会 6月11日(水) 授業学級：3年B組
授業者： 田口裕文教諭
学力向上推進カウンセラー：秋田大学 山岡剛教授

(2) 成果

カウンセラーから「意図的な課題を設定すること」の大切さを指導していただいた。そのことを踏まえ、何度も研修を繰り返し、授業改善を行った。10月31日(金)に本校を会場に「大曲仙北教育研究会」の授業を公開した。カウンセラーからの指導、助言を生かしたよい授業であったと好評であった。



理科の授業

2 英語の授業について

- (1) 授業研究協議会 6月11日(水) 授業学級：1年A組
授業者：草薙恵美子教諭, A L T フィリップ・フューイ, 田口隆文教頭
学力向上推進カウンセラー：秋田大学 三宅良美准教授

(2) 成果

カウンセラーから、シートのバリエーションの工夫の仕方や、フィードバックの仕方等、指導主事や本校職員とは違った角度からの指導・助言をいただいた。このことにより、今までとは違った研究を進めることができ、生徒たちの学習意欲の向上、学力の向上につながった。今後も機会があれば何度もカウンセラーの先生に足を運んでいただき、年度途中や年度末にも指導をお願いしたいと思った。

3 道德の授業について

- (1) 授業研究協議会 9月19日(金) 授業学級：3年B組
授業者：荒川公子教諭 学力向上推進カウンセラー：秋田大学 佐藤修司教授

(2) 成果

カウンセラーの助言を生かし、読み物資料を基に、体験活動との関連を図った道德の授業を実施した。佐藤教授からは「体験活動を生かした道德は、自分の肌で感じた記憶を生かすことのできる素晴らしい実践である」という指導があった。生徒の心に響く道德の授業を展開することで、生徒たちの心が成長し、このことが温かい人間関係、学級づくりにつながり、よりよい学習集団が形成され、生徒たちの学力向上に生かされたと思う。

V 成果の普及に関する取り組み

- (1) 学力向上推進カウンセラーに指導していただいたことを基に研究を進め、「大曲仙北教育研究会」で理科の授業を公開し、好評であった。
- (2) 学校報やPTAの懇談会などで、学校での取り組みや生徒の変容について保護者や地域の方々に知らせている。

VI 研究実践を振り返って

カウンセラーから、研究授業当日に指導や助言をいただくだけでは、中身の薄いものになってしまう。学校の研究概要を送ったり、指導案の検討等について事前に何度も連絡を取ったりするなどしながら、カウンセラーを含めた複数のメンバーで教材やよりよい指導方法について研究授業の事前から深めていくことが、最も重要なことであると思った。

研究主題

確かな学力を身に付け、主体的に学ぶ力をはぐくむ指導 ～基礎・基本の定着を図る学習指導の工夫～

横手市立山内中学校 校長 鈴木 博

I 学校の概要 (平成20年5月1日現在)

	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特別支援学級	計	教員数
学級数	1	2	1				2	6	1 3
児童数	2 6	4 4	3 8				2	1 1 0	
学校のホームページアドレス				http://academic4.plala.or.jp/santyu/					

II 活用のねらい

昨年度の生徒による授業アンケートで、じっくり考える時間を望む声があった。それを受けて生徒が気付いたり考察したりする時間を重視した授業づくりを進めている。また、本校の実態として学習集団内での学力の二極化傾向も見られる。このように個人の学力に著しく差のある集団に対して、全体の興味を引き付ける導入やねらいに迫る発問と補助発問の在り方について、大学教員からのアドバイスをすることで授業力を高めたい。

III 特徴的な取り組み

1 提 案

国語科では、学力の二極化傾向を「集団での学習では発生しやすいが、相互に補い合えるもの」ととらえた。そこで、蓄積した生徒一人一人の評価に基づき、既習事項の定着した生徒とそうでない生徒で意図的に構成したペアによる学習を授業に位置付ける。前者は、課題解決の過程や解答の根拠を相手に伝えることで、自分の理解をより確実なものにできる。また、後者は、アドバイス等を受けることで、自分がどこまで理解し、どこでつまづいているのかが明確になり、その解決策を学ぶことができる。このように、学び合いから生まれる互いの気付きを重視して学習を進めることで、学力の二極化傾向に対応していく。

2 成 果

国語科では、年度当初から上記の「提案」に基づき、意図的なペア学習を進めてきた。その結果、下記の「生徒による授業アンケート」に、授業に参加する意識の高揚と、学習内容の定着がうかがえた。生徒は互いに気付き合いながら学習を進めることを好意的に受け止め、それによって学習への意欲を高めている。学力向上推進カウンセラーとしてお招きした秋田大学の阿部昇教授からも「ペアでの高め合いは十分達成されているので、さらに広がりや深まりを目指すために、グループでの学習を構築していった欲しい。」という指導をいただいた。

生徒による授業アンケートより、平成19年度1年生と平成20年度1年生の比較

(平成19年度は回答者40名、平成20年度は回答者26名)

(A・B・C・Dの評価を5・4・2・1と数値化し、平均値を求めたもの)

○課題意識をもって授業に参加できた (H19) 3.95 → (H20) 4.77

○学習内容が理解できた (H19) 4.29 → (H20) 4.81

IV 実施の概要

- ・ペアやグループ学習での二極化傾向への対応

本校では学力の二極化傾向への対応として、チームティーチングや少人数学習といった指導形態の工夫だけでなく、一単位時間に一人の指導者で対応できる工夫は何かを模索した。その結果、ペア学習や4～6名のグループ学習が有効ではないかと考え、それぞれの教科で単元や題材に合わせて学習形態を工夫してきた。例としては、理科の実験内容に応じたグループ編制、社会科のグループ別調査学習における調査内容に応じたスモールステップ化などがあげられる。今回はそれら複数教科の取り組みを代表する形で、習熟の程度が異なる生徒によるペア学習を国語科で提示し、その学習効果を秋田大学の阿部昇教授に指導・助言していただいた。

具体的には「意見文を書く」活動において、陥りやすい表記や叙述の誤りを見つけるという導入部分の提案授業となった。生徒たちは、個々の間違い探しを終えると、事前の評価に基づいて構成されたペアごとに、自身の見つけた間違いについて意見を交換し、考えを深めていた。ペアごとの確認が終わった生徒は、別のペアと4人のグループを作り、考えを伝え合う姿も見られ、年間を通した国語科の取り組みの成果が表れていた。学力向上推進カウンセラーとしてお招きした阿部昇教授からも、「ペアでの学習は効果をあげていますが、ここまで育っている山内中の生徒であれば、課題によっては他教科のように4名程度のグループ学習にすることで、さらに学習の広がりや深まりが生まれます。」という指導をいただき、研究の確かさを裏付けてもらうことができた。実際、同時期に行った国語に対する授業アンケート結果からも、昨年度よりすべての項目で高い評価を得ており、生徒もこの学習形態によって力を伸ばすことができたと感じている。

平成19年度1年生に対するアンケート結果(40名)	A	B	C	D	平均
①この時間は何をする時間かはっきりと分かった。	29	11	0	0	4.73
②今どんな活動をするかわかって学習できた。	21	18	1	0	4.48
③じっくり考えたり、活動したりする時間が十分にあった。	29	10	1	0	4.68
⑧課題意識をもって授業に参加できた。	9	26	5	0	3.98
⑩学習内容が理解できた。	19	18	3	0	4.33

平成20年度1年生に対するアンケート結果(26名)	A	B	C	D	平均
①この時間は何をする時間かはっきりと分かった。	24	2	0	0	4.92
②今どんな活動をするかわかって学習できた。	23	3	0	0	4.88
③じっくり考えたり、活動したりする時間が十分にあった。	20	6	0	0	4.77
⑧課題意識をもって授業に参加できた。	22	3	1	0	4.77
⑩学習内容が理解できた。	21	5	0	0	4.81

V 成果の普及に関する取り組み

成果の普及については、隣接する山内小学校教諭に本事業に参加していただいたことで、小・中学校連携の一つとして位置付けることができた。一地区に一小学校、一中学校という条件を生かして情報の共有化を進めたい。

VI 研究実践を振り返って

学力向上推進カウンセラーとして阿部教授をお招きしたが、年度のまとめの時期に来校を願ったことで、自校が進めてきた研究の方向性を裏付けていただくことができた。生徒の実態をとらえ、それを向上させるための自校の手立てを尽くしたうえでのカウンセリングという、自校で主体的に進めた取り組みは、生徒にも指導者にもとても有益であると感じた。

平成20年度

学力向上推進事業 実践事例集

発行月：平成21年3月

編集・発行：秋田県教育庁義務教育課

住所：秋田市山王三丁目一番一号

T E L : 018-860-5144

F A X : 018-860-5862

